

《死神》と恐れられた優 しき剣士

はまち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至って普通の中学3年生 影山 海斗

彼はごく普通の中学生だが一つだけ違う所があった

それは、人に怖がられているという事

彼は異様に目付きが悪く、初対面に怖い印象を植え付けてしまう

親も交通事故で亡くなって孤独と悲しみの日々――

そんな海斗の日常をある一本の電話が変えた

〈注意〉

この作品はタグにもあるように不定期更新と気まぐれで更新していきますのであまり速く更新できる時もあるれば遅い時もあります。

後は文に違和感を感じた場合、誤字・脱字がありましたら気軽に伝えて下さい。

初投稿なので温かい目で見守ってくれればと思います。

目次

アインクラッド編

第1話【孤独少年】	1
第2話【運命の糸】	10
第3話【救い】	21
第4話【デスゲーム】	35
第5話【生き抜くためには】	59
第6話【迷惑なんかじゃない!】	68
第7話【命を賭けた戦闘】	82
第8話【死闘の果てに】	92
第9話【胸の奥の知らない気持ち】	103

第10話【茶色と青の少女】	124
第11話【翠の翼竜】	142

アインクラッド編

第1話【孤独少年】

夕日が差し込む教室。

一人、教室に残っている少年の背中を照らす。

窓から風が入り込み、音が流れるように離れていく。

少年の片目を覆う前髪を揺らした。

「んっ?」

普段覆っている目の視界が白く染まり、目を開けた。

——ここは?

寝ぼけているせいか数秒間自分が何処にいるのか分からなかった。

段々視界が重なっていく、やっと自分が何処にいるかが分かった。

——教室。そうか俺はあの後気を失って…

そう。俺は確か帰ろうとした時、久しぶりいや何年かぶりにクラスメイトに声を掛けられた。

たしか、カラオケに誘われて、何円ある？　と聞かれたから財布をだして……ダメだ。それからの記憶がない。

もしかしてと思い財布を確認すると、案の定現金がなくなっていた。盗まれたか。まあすり対策に普段持ち歩いてる財布には最低限のお金しか入ってないから取られてもそんなに困らないのだが、やり方がやり方だけに無性に腹が立った。

俺も声を掛けられたのが嬉しくて油断していたのも事実だが。

もう後悔しても仕方がないと思い、教室の扉に向けてあるき始める。

軽く舌打ちをしながら扉を開けて教室を出ようとする——した瞬間下に人影が見えた。角度から横に視線を向けると一人の女の子が立っていた。

中学の制服を綺麗に着こなし、桜を半分に切ったような髪留めをしている。

鮮やかな銀髪は腹の所まで伸びていて、廊下に夕日が差し込んでいたためか銀髪に橙黄色が薄く色づいている。胸の部分に手を着けているが腕は服の上から分かるくらいに細い。全体的に細いのが分かるが、服を押し返している胸部は相当なものだ。

——たしかクラスメイトだったはず、確か名前は倉橋さんだったか。俺は出来るだけ優しい声で、

「倉橋さん？　あの……すみません！　私ちよつと忘れ物を取りに来ただけなので、すぐに帰りますのでごめんなさい！」

ここで何を、と言う前に倉橋さんが全力で謝罪をしながら後ずさっている。彼女の頬から朱色の色素が消え、小刻みに肩が震えている。

——なるべく怖くないようにしたつもりなんだが。

今も動揺している倉橋さんが謝罪を続けているが、やがて声が小さくなり耐えられなくなったのか教室に入って行ってしまった。

恐らく俺が帰るまで教室に引きこもっているつもりだろうから、もう気にせず帰ることにした。

——俺は自分の顔、特に目が嫌いだ。大嫌いだ。

俺、影山 海斗はクラスの皆から怖がられている。一番の原因は目つき、このめのせいで初対面の印象がだいぶ怖くしているのだろう。

街を歩けばそこら辺のチンピラに「テメエどこのもんだ？」と聞かれ、初めてあつても俺の顔を見た途端、顔を引きつるかヒツと小さい悲鳴を上げる。俺はそんなこの目つきが嫌いだ。それに自分の嫌な所なら幾らでも出てくる。

最終的にクラスでは「ヤンキーとタイマン張った」とか「悪い人達と関係を持っている」だとかそんな嘘の噂が流れている。いや、もう学校全体だろう。

当然そんな事はしたことはなく、普通の中学3年生だというのにどうして見た目でここまで悪い印象を持たなくちゃいけないのか。そんな疑問がいつも俺の頭の中には浮かんでいた。

そんな思考をしながら目的の場所に付き足を止め見上げる。ここは日本で一番の病院、東京病院。ここに俺の過去を、大嫌いな所を受け入れてくれた唯一の人がいる。

俺は速足で受付に面会の許可を貰いエレベーターに乗った。受付の人に少し怖い物を見るような目で見られるのはいつもの事。

チンツと音がなり体にかかる重力に抵抗し、エレベーターを出て502号室に行き着く。当然ここは病室なのだが、この階にはこの病室以外病室が存在しない。何故か番号が付いてあるのは何かがあった時のコールを見やすくするためだろう。

軽く深呼吸してから扉を開けて部屋に居る人に声を掛けた。

「やあ、来たよ。李鈴^{いず}」

「海斗！ 待ってたよ！」

俺の目の前のベットに座っている李鈴は俺を見ても顔色一つ変えずにいつもの様に優しく笑ってくれた。

——李鈴と出会ったのは1ヶ月前だった。

その日はヤンキーにカツ上げられ財布の中身を失って俺は自宅に帰ってきた。俺は一人暮らしで住んでいる所も安いアパート。

「ただいまー」

帰宅してつい言ってしまう言葉だが、当然返事は聞こえない。今年15歳になった俺だが、一人暮らしをしているのは理由がある。

親が許してくれた訳でもないし、自分で望んでもいない。

そう、いないのだ。俺には。

母親は一年前に交通事故で命を落とし、そのあと親父は母がいなくなつたショックで俺を置いて何処かに行つてしまった。今も親父には連絡つかないし、今どうしているかも分からない。もしかしたら母を追つてもうとつくに自殺しているかもしれない。

だから俺にはもう帰る事を待つてくれる人も、支えくれる人も、俺の事を理解してくれる人も、もういない。

たしかそのくらいだろうか、学校で妙な噂が立ち始めたのは。クラスメイトの事なんかどうでもいい、どうせあいつらは俺の事を分かるうともしてくれないし、分かるはずもない。

だから俺は今も、これからも孤独で強く生きていくしかない。そんな思考をしながらベットに座る。そして、視線を枕元にある物に移す。

——だから俺は自分で逃げ道を作った。

それは仮想世界。

つまり、ネットの中。ネットやゲームでは自分の好きなキャラ、見た目が変われる。現実のこんな弱く、辛い、人を怖がらせるような自分は大嫌いだ。だから、ネットにもう一人の自分を作った。

そして、ベットの上に張つてあるポスターに目を向ける。

そこに書いてあったのは鎧を着た剣士がモンスターと戦っている画像と街での人達が写っている画像。

その下には「ソードアート・オンライン 2022年 11月6日 正式サービス開始」と書かれていた。

ある日、突然ある人物が設計したゲーム機がゲーム界に革命を起こした。

それは、VR技術を使ったゲーム機。何十年か前に最初の家庭用VRゲーム機、確かに名前は……：PSVR？ だったか。

その最初のゲーム機から進化したゲーム機が最近発売された。それは、フルダイブ型次世代VRマシン。《ナーヴギア》このナーヴギアはヘルメットみたいな形になってお

り、それを被る事でゲームを始められる。

だが、このゲーム機は今までのように視点を動かすだとかそんな次元のものではない機能が備わっていた。それは、ゲームの中に実際に入り、ゲームの中のキャラを自分で動かせる事が出来るのだ。

ヘルメット型のナーヴギアは被ると首までかかる程に大きい。そして、首のうなじの部分で脳が体に送る命令をナーヴギアがシャットアウトし、ゲームの中のキャラに送れる事が出来る。たとえば、ゲームの中で暴れまわろうが現実世界の体はピクリとも動かない。

その機能は、ゲーム界にこれまでにない革命を起こした。ゲームの中に入れるなんて誰もが夢見たり、憧れたりしたものだろう。

開発者は茅場 晶彦。このナーヴギアを作った人でもあり、今度発売されるゲーム、ソードアート・オンラインの開発者でもある。茅場晶彦はインタビューでこう発言している。

「これは、ゲームではあっても遊びではない」

このコメントから茅場晶彦がこのゲームをどんなに真剣に作ったかを思わせるコメントだった。

このソードアート・オンラインがもうすぐ発売、俺は少し前に行われたβテストに選ばれて、βテスト期間中、学校も休んでゲームをしていた。

ソードアート・オンラインの舞台は浮遊城アインクラッドという100層にも及ぶバカでかい城だ。層の中にはプレイヤーが拠点とす街や村の居住区や様々なモンスターやギミックがあるフィールド。そして、フィールドの何処かにあるダンジョン、迷宮区があり、層を登るには迷宮区の最終ボスのフロアボスと呼ばれるモンスターを倒す以外方法はない。

俺はβテスト期間では第10層まで登ったが、俺がこのゲームで受けた感動は凄まじいものだった。まるで現実のようなグラフィックとどこまでも続く大地。俺はこの仮想世界に、も一つの現実に魅了されていた。またあの世界に戻れると思うと、ドキドキとワクワクが止まらない。

そんな事を考えながら、段々上機嫌になっていると、

——プルルル、プルルル——

スマホの着信音が部屋に響いた。誰だと思ってスマホを取り出して見てみると、

「知らない番号だな……」

とりあえず出してみることにした。

「もしもし」

「あ、すみません。そちらは影山さんのお電話でしょうか？」

「え、ええ、はい」

知らない女の人の声に知らない番号、どうして俺の名前を？

「実はですね、いきなりで申し訳ないですけど——」

第2話【運命の糸】

「私は、東京病院で看護婦をしております。立花 和美あゐと申します」

「はい、で要件は何ですか？ 少なくとも俺は、一まだ病院のお世話になるような事はしてないと思いますが」

「はい、そうなんですけど… え？ まだ？ ……じゃなくてですね、少しお話がありましたして」

「…はあ」

俺は少し面倒くさくなりながらも椅子に寄りかかりながら聞いていた。

「凄く驚く話だと思うのですが、どうか落ち着いて聞いてください。実はあなたには妹がいます」

「——はっ。」

俺は思わず聞き返してしまつたが、電話の向こうにいる女性は無視して話を続けた。

「私は今、影山 李鈴という方を見ているのですが——」
「ちよつと待って下さい。今頭を整理します」

俺は話を続けている和美さんを止め、思考しながらふと、問う。

「あの、それが本当なら今の俺の家族事情は知ってますよね」

「…はい」

「俺の親は二人共いなくなつたんですよ？　そもそも俺は一人っ子です。だから俺は今まで孤独に耐えて過ごしてきたんだ！」

俺は頭で思考をしている内に段々苛立っていき、声を荒立てた。

——俺に妹がいるだど？　なぜ親父は出て行く前にそんな大事なことを一言も言つてくれなかつた、それになぜ今まで教えてくれなかつた。

俺に家族がいたなら俺は…俺は！

「こんなに苦労してなかつた!!」

思わず声に出してしまつた怒りの叫びと共に隣でドンツと壁を叩く音が響く。

だが、和美さんは予想していたかのように冷静に返してくれた。

「落ち着いてください。あなたが一人っ子なのは間違ひありません」

「すみません、取り乱しました——は？」

再び付け加えたようにさらつと言つた言葉を俺は聞き逃さなかつた。

「えつと電話では話し辛いですし、本人に会わせたいですし東京病院に来て頂いてもいいですか？」

俺が覗く窓ガラスの視界が凄く速さで景色がスライドしていく。

タクシーで東京病院に向かう途中、俺はもう一度電話のことについて思考を回らせていた。

「お客さん、付きましたよ」

「はい、ありがとうございます」

俺はお金を払い、タクシーから降りると、

「流石にデカイな……」

俺は東京病院の規模に唾然と呟いた。

日本の病院で一番だと言われている東京病院。その建物の大きさは凄まじく、学校より一回り以上はあるだろう。

ひとまず中に入り受付に向かった。

「えっと、影山李鈴さんの面会に来たのですが……」

「——っはい、お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

一瞬、血の気が引いたような顔をされたのは気のせいであつてほしい。

ていうかこの人だけじゃなくて、周りの人からも何か怪しい目で見られてる気がする。

「影山海斗です」

名前を名乗つた途端、受付の人達が一齐に驚いた。中には「えっ!？」と声も聞こえた。「すみませんっ!」李鈴ちゃんのお兄さんでしたか、予想と全然違つたので不審者でも来たかと……つと失礼しました。えつと今先生をお呼びしますのです」

全く隠せてない本音を言つて受付の人は奥の扉に入つていった。数秒後、扉が開き全くの別人がでてきた。

20歳後半くらいだろう、一言で言うならダンディーな見た目をしていて半袖から出ている二の腕は鍛えているのか引き締まっている。

「やあこんにちは。わざわざ来てくれてありがとう。私はこの病院で医師をしている竹田と申します。よろしく、お兄さんっ」

陽気な声でそう言いながら俺の肩に手を置いてきた。顔を見るとしてやったとばかりにニヤニヤしていた。

——やべえ初対面だが、無性にぶん殴りたい。

俺は何とか怒りを覚えて、

「御託はいい、速く電話の内容を詳しく」

「おっと、手厳しいね。じゃあこっちに」

俺が案内された所は3階の個室に連れてこられた。

客室に連れてかれると思っていたのだが、部屋はただ真ん中にぽつんと机と椅子が置いてあるだけだった。

「すまないね、他が空いてなくて、それにあまり他人に聞かれない内容でもないしね」

そう言い、俺達は向かい合わせに座る。するとさっきの陽気な雰囲気をただ寄せていた顔は真剣な顔に変わった。

俺もそれにつられて思わず顔を引き締める。

「じゃあ電話の件なんですけど、半信半疑だと思えますが、あれは真実です」

「戸籍上は違いますが、名前はあなたと同じです。あとこれが李鈴さんの保険書です」

そこには確かに影山李鈴と書いてあった。保証人は――

「親父？」

「はい、実は李鈴さんはあなたのお父さんの孤児です」

「孤児……ということとは親父が拾ってきたのか？」

「はい、あなたのお父さんが海外出張に行ってる時に捨てられた李鈴さんを保護し日本に連れてきてたんです」

——そういえば昔親父が出張に行っている時、会社の人が戻ってきてなぜか親父だけが一日遅く帰ってくる事があったな、あの時の母さんの心配そうな顔を今でも覚えてい

る。
「赤ん坊の頃だったので、李鈴さんは気づいてないと思います」

「で、最近親父が母さんを失ったショックで俺を捨てたからその影響で李鈴も捨てられてしまったと」

「はい、その時は病院に入院していたので今ではこの病院で保護していますが——」

「保護じゃないだろ？ 治療だろ」

「えっ？」

俺は竹田医師の話を断ち切るようにして続けた。

「なぜそんな嘘を付くのかは知らないが、こんな日本で一番と言われている病院で、何の病気もない少女をわざわざベット一つ使って保護するなんてありえないだろ。保護するならこんなデカイ病院のベットを使うより、他のところでもいい」

「しかも、この病院で治療中だということは李鈴が患っている病は相当深刻だろう。違うか？」

竹田医師は口を半開きにしながら俺の話を聞いていたが、やがて微笑みながら、

「こつちが驚いてしまいました。ちゃんと順を追って話していくつもりだったので

が、そこまで予想していたとは」

「俺は速く本当の要件を聞きたいのでな」

「では、本題に入りましょう」

暖房が効いた部屋の中、さっきの受付の人が持ってきてくれたコーヒーを少し飲み、口を潤わ^{うるわ}せて竹田医師は口を開いた。

「あなたが言っているように、李鈴さんは今は大丈夫だと思いますがこの状況が続けば不味いことになります」

「李鈴さんがかかっている病は遺伝による物なので恐らく捨てられた親の遺伝による発症かと」

「そして、親が病にかかって子育てが限界に来て捨てられたと」

「はい、恐らくは。ただ、病自体はこの病院のような大きい所で手術すれば治る可能性が高いのです」

「? ……ならなぜ治そうとしない?」

「それは、李鈴さんの体質にあります」

「李鈴さんは麻酔が効かない——というか麻酔に拒否反応を起こす体質だったのです。」

麻酔をすると全身が大きく震えだします。震えている状況でオペを出来る程の腕をがある人はいないですし……」

「それに、空気でも注射でも駄目、私たちは正直お手上げでした」

俺は外見では動揺を見せず、指を目の前で交差させ、余裕の笑みを何とか作り出した。「ほう、この病院でもお手上げな体質か、だが俺がここに呼び出されているって事はあるんだろう？ どうにかできる方法が」

「あなたは本当に頭がキレますね。はい、一つだけあります。李鈴さんの体質を無効化して手術ををできる方法が」

「それはフルダイブ技術を使うことです」

大方予想通りの答えが帰ってきた。だが、

「フルダイブ技術は五感の全てを脳に伝えない事が出来るからフルダイブによる麻酔の危険性や駄目な体質を守る人を救える考え方だろう」

「だが、流石に脳の五感を塞ぎ止めている電力でもナーヴギアじや流石にメスで斬られる痛みは消しきれないと思うぞ」

「はい、そのとおりです。でも、フルダイブ技術はあなたが思うよりずっと進化をしています。あなたが言う電力を最大限に上げれば斬られる痛みも消せます」

「つまり、その技術を使えば、李鈴の手術が出来ると」

「はい、元々麻酔の代わりとして期待されていたフルダイブ技術ですから、今も試作品中の試作品は完成しています」

「ですが、今の所はただ患者をフルダイブして麻酔を使わずに痛みを消せて中でゲームを出来るくらいしか出しません」

「そして、あなたに頼みがあります。手術を自体は保険が効くのですがこの試作品の医療用フルダイブ機は保険が効きません」

「だろうな」

「その保険が効かない試作品は一体おいくら万円で作らせてもらえるんだ？」

そう言うのと竹田医師は顔を俯けて眉間にシワが寄る。

「今回は異例という事で借りなられましたが、その金額は200万円です。我々も何とか頑張ったのですがコレが限界でした」

「まあ国家レベルで研究している代物を200万で借りれるだけまだ良いほうさ」

「一応本人には許可を取っ手います。李鈴さんの保護者であるお父さんのお父さんの居場所がわからない以上、あなたが李鈴さんの保護者です。無理にとは言いませんが……どうでしょう？」

「確かに俺にとつては受けたほうが良い。だが、まだ決められないな。まずはその試作品と李鈴本人と話がしたい」

俺はあの部屋から出て、白いタイルの廊下を歩いていった。

この病院は日本で一番を誇るはずなのだが、こうして歩いていると殆ど人はいない。もしかしたら李鈴の事を詳しく知っている人は少ないのかもしれない。

俺は思考をしながら歩いて、数分。「ここです」という竹田医師の言葉で思考を停止する。

——ここが、国家レベルで研究している医療用フルダイブ機が置いてある場所か：

そこは大人が通っても余裕で隙間ができる程の大きいドアだった。俺は視線を扉の横に移す。

そこには「特別手術室。関係者以外立ち入り禁止」と書いてある。

竹田医師が自分のネームプレートをスイッチにかざすと音と共に自動ドアが開いた。扉の奥は暗闇だった。竹田医師が入った途端部屋に明かりがつく。

まず視界に入ってきたのは部屋を仕切るガラス板だった。そのガラスの奥は何も見えない暗闇。

「このガラスの先が試作品が置いてある場所だよ。今明かりをつける」すると部屋の橋にあるスイッチを入れる。途端、ガラスの奥が眩しいほどの光りに包まれ思わず目を細める。やっと明かりに慣れてきて奥が見えてくる。

その先にあったのは人が寝るには少し大きいベットと周りには医療道具らしい物が

置いてある。そして中心のベットの上半分に被せるように黒い四角の物体があった。

ガラスの奥は結構の広さがあるはずなのだが、あの黒い物体が部屋を占領して置いて周りにある医療器械のどれよりも大きい。

「この部屋は無菌室だから、必要な時以外は開けないから入れないのは我慢してほしい。そしてアレが医療用フルダイブ機の試作品だよ」

「その試作品というのはもしかしてあの黒い物体か？」

「ああ、そうだよ。見た目からじゃただの黒い物体にしか見えないだろう？ でも試作品じゃ外見何て気にしないもんだよ」

「確かにな」

「さっきも言った通りあれはまだ麻酔の代わりになる機械でしかない。もしも今回の事があれば医療用フルダイブ機の研究は大いに進むだろう。そしたらすぐ近い未来にコレを必要としている人を救えるかもしれないんだ」

「どうだい？ 実物を見て気は変わったかい？」

「残念ながら俺にはそんなテンプレみたいな同情は効かない。まだ決められない。次は李鈴に会う」

「分かつてはいたけどね。さあ李鈴さんの部屋はこつちだよ」

第3話【救い】

李鈴の部屋は特別手術室からそう遠くない所にある。

白いタイルの床に同じの壁に一つだけ色の違うブラウン色の横開きのドア。まるでこの部屋を強調したいかのよう目立っている。

ドアの横には《502号室 影山 李鈴》と書いてある。

「では私はここで待っているとするよ。話をしてくれるといい。いい結果を待ってるよ」
「ああ、じゃあ行ってくる」

俺はドアのテツテを握る。鉄の冷たさが手のひらに伝わってくる。それは俺の心の中にも届いているような……

——このドアの向こうに俺の妹に当たる人、つまり家族の李鈴がいる。俺が家族に会うのは去年、母が亡くなって以来だ。

俺のもういない家族は俺を知ってくれた。認めてくれた。俺が大嫌いな部分も家族だけは何も言わなかった。

だが、今回は違う。いくら家族のような人だとしても今まで一度も会ったことのない殆ど赤の他人だ。もしかしたら顔を見られた途端怖がられ、拒絶されるかもしれない。

もしそうなったら俺は今度こそ生きる気力を見いだせるだろうか？

俺は覚悟を決めて、拳に力を入れてドアを開けた。まず視界に入ったのは白いカーテンだった。そのカーテンには人の形のシルエットが写っている。

——この奥にいるはずだ。

俺は深呼吸してからカーテンを回り込んでその奥のシルエットを確認した。

その奥にいた李鈴は白に統一させているベットに座り、窓を見つめていた。

肩にかかるくらいの長さの朱色の髪、見ていたら吸い込まれるように綺麗な薄緑の瞳。

顔の輪郭は入院中だからか少し細く、腕も触ったら折れてしまいそうだ。

白いワンピースに身を包んだ少女は俺に気づき、俺を見つめ表情一つ変えずに微笑んだ。

「あなたが、私の兄さん？」

透き通るような綺麗な声が耳に響いた。心臓がバクバクだった心が安堵し俺は無言で頷く。

「そう、嬉しいな。本当に来てくれるとは思わなかったから」

俺は自然に話している李鈴を見て、体から思い何かが抜ける感じがした。

——ああ、そうか。俺は今まで自分が家族を亡くして本当に安心した時なんか一度も

無かった。

外に出れば自分が嫌になり自宅に帰れば孤独に襲われる。ネットゲームをしていても完全に安心したと思つてなかったんだ。

自分でも気付かず苦しみを、悲しみを貯めに貯め続けてきたのが今消えてなくなつたような気がした。

俺は今、心の底から安堵していた。体が軽くなり、体の力が一瞬抜けて立膝になつてしまう。

「どうしたの!? 具合でも悪いの?」

もう一度声を効いた途端、涙が溢れそうになるのを必死にとめる。

この子と一緒にいたらいつ自分の弱い部分を見せてもらうか分からない。だが、恐れはない。きつとこの子は俺の弱い所を見せてしまつても優しく受け止めてくれるだろう。

さつき会つたばかりだが、なぜか確信があつた。

だが、今は俺がすべき事をするべき時だ。今この瞬間で俺の答えは決まっていた。

そうと分かつてはるはず、はずなのにでも、もう少しこの感覚に浸っていたい。長い間感じられなかつた家族の暖かい感覚に。

「とりあえず、そこに腰掛けて? 大丈夫?」

俺は静かに隣の椅子に腰を掛ける。それから数分、部屋には静寂が続いた。

数分の静寂を断ち切ったのは李鈴だった。

「そういえば、兄さんの名前聞いて無かったね……知ってると思うけど私は李鈴。あな
たは？」

「海斗。影山海斗だ」

「海斗……さん？ う〜ん……」

なにか腑に落ちない様子で体を揺らしながら唸っている。やがて微笑むと。

「えへへ、何か兄さんに固くするのも変な気がするね。もし……良かったら呼び捨てでも
良い？」

もう殆ど敬語じゃないし今更何を。と言いついそうになるのをグツと抑え、

「ああ、良いよ。好きなように接してくれれば」

「本当に海斗が来てくれて嬉しかった。ずっと一人だったから……」

李鈴は右手を胸に当てながら目を細める。が、俺にはそれが偽りの笑顔だとすぐわ
かった。

俺はずっと人に嫌われ続けてきた。だから自然と人の顔色を気にするようになって
しまった。もしかしたらこの人は大丈夫かもしれない。そんなに怖がれなかったら良
いな。などの淡い期待を込めながら見るようになってしまったため、俺は顔で人の感情

を大体分かるという覚えたくなかった特技を覚えてしまった。

——今この子が見せている笑顔を偽り。そして瞳に明るさが消えた。俺と同じ瞳だ。きっとこの子は俺と同じかそれ以上の苦しみを持っている。そして、俺が日常的に見ている恐怖に襲われた目。

俺は一瞬体が氷のように冷たくなるのを感じたがすぐにもとに戻る。もしも李鈴が俺の顔に怯えている場合、最初に恐怖を感じるはず。だが、最初李鈴の瞳には恐怖が無かった。

つまり、李鈴はまた別のことに恐怖している？　しかし何に？

とにかく会話を続けようと部屋を見渡す。

「確かにここじゃ何も無いし、暇そうだもんな」

この部屋には李鈴以外入院している人は誰もいない。廊下を歩いている時もあったがこの階には恐らくここしか病室はない。つまりこの部屋は李鈴専用なのだろう。

だが、一人の女の子が使うにはこの部屋はだいぶ広い。見ただけでは具体的な広さは分からないが俺の部屋よりも数倍は広いのが分かる。

「この部屋には私以外しないし、いつも私の検査をしてくれる立花さんも話してはくれるけどいつもって訳にはいかないし、なんか遠慮してるって感じがするの」

さつきから話していることに顔が暗くなっているのが分かる。もう一般人が見ても

分かるくらいに。やがて、李鈴は暗い顔のまま呟くように言った。

「私ね——自殺しよう思ってたの」

俺はその言葉を聞いた途端目を見開いた。

「自殺……?」

「うん、私は一年半くらい前にこの病院に入院したの。それで病気を治すために手術をしようとしてたんだけど、私には麻酔が効かないことを告げられて、先生達も何とかしようとしてたんだけど。でもどれも駄目だったらしくて……」

「それで先生の皆に迷惑かけて、お父様もわざわざこんな遠い所まで御見舞に来てくれて……でもある日、お父様の顔に違和感を覚えたの。だから私は自分の状態なんか分かんなかったし分かりたくなかった。でも、聞かなくちゃでって思ってた聞いてみたの。私は今こういう状態なの? って」

李鈴の顔は暗くなる一方、苦しさも浮かんできてくる。でも止める手を必死に抑えた。今李鈴は自分の過去を話している。きつとコレは李鈴並みのSOSだ。俺も救われた。だから俺も同じ方法で君を救う。

「そしたら先生達じゃ私の体質はどうにも出来ないって。私の病気は進行が遅いけどこのままじゃ後3年後には死んじゃうって事も教えてくれた。でもまだ字時間はたっぷりあるからきつと解決する方法が見つかるって慰めてくれたの。でも、お母様が亡く

なってお父様は何処かに行つてしまつて寂しかった。でも私には悲しむ資格なんてない。私なんかより本当の子供の海斗の方がずっと悲しいはずだつて。孤児の私にはそんな事は許されない」

段々と声が震えていく。だが、俺は震える声で言つた言葉を聞き逃さなかつた。

「え!? 自分が孤児だつて事をもう知つてるのか!? でもなんで……」

「知つたのは……最近。最初はお父様の雰囲気でなんとなく感じたんだけど、でも私には実は兄さんがいるつて言われて確信した」

李鈴は凄いい特技を持つているらしい。だが、雰囲気でも自ら答えに気づくとは李鈴はかなり頭がキレるらしい。

「だから怖かつた。私の体質を解決できる方法が見つかつた時」

「医療用フルダイブ機の事か」

「うん、その時を聞かされてそれを使えば私は治るつて。でもそれを使うのに沢山のお金が必要になる事も知つて……それをお父様がいなくなつたから私の兄さんに払つてもらうしかないつて知つたから。何処かにいる兄さんは私よりずっと悲しい思いをして苦しんでるはずなのに、私のせいで迷惑かけて……こんな会つたこともない赤の他人同然の私なんかの為に来てくれるのかなつて。でも来てくれなくても文句を言う権利なんて私にはないつて思つてたの。だからつ来なかつたら、その内死ぬのだったらこれ

以上迷惑掛けない。だから死のうと思つてたつ……」

さつきよりも声が掠れて震えている。言葉の間にしゃっくりが出始め、瞳が滲んでいった。

「だから、嬉しかったつ……来てくれた時、凄く嬉しかったつ」

滲んだ瞳から大粒な涙が溢れていく。

——李鈴も俺と一緒にだつたんだ。自分を嫌いに思つて相談も出来なくなつて、自分を追い込んで……李鈴はきつと俺よりも追い込まれていたんだ。

だつたら今の俺がすべき事は李鈴を救うこと——

俺は泣きじやくる李鈴を体を包み込むように腕を背中に回した。途端、李鈴が「えつ？」と声を漏らしたが、すぐに優しく微笑み俺に体を預けてくる。

「俺がここに来た理由は家族がいると分かつたからだ。そして、君に救われた」

「救われた？ 私に？」

——ああ、ダメだ。李鈴と一緒にいたら自分の弱い部分をどうしても隠しきれない。

「ああ、君に救われた。俺は母さんを失つてから苦しみと悲しみの日々だった。俺は自分が大嫌いで自分に苦痛を溜め込んでた。俺はこのまま孤独で生きていくと決心していた。

でも俺は何処かで家族のような俺を分かってくれて認めてくれる人が欲しかったん

だ。

だから、君に会えた時、自分の中の苦痛や悲しみが全て消えた気がしたんだ。だから俺は君に救われた」

俺は李鈴の頭を優しく撫で、話を続ける。

——今だったら、少しは泣く権利はあるか……

「俺は決して君の事を迷惑だなんて思っていないし、むしろ感謝してる」

「私、役に立ってるの？ 今まで迷惑しか掛けてない私が？」

李鈴から嗚咽が漏れ始め、震える声は近くにいてもギリギリ聞き取れるくらいだった。

「ああ、十分すぎるほど立ってる。他の誰かが君を迷惑だと思っけていても、俺だけは君の事を迷惑だなんて思っけてないから。だから自分を自虐しなくて良いんだ」

「ほら、自分の事を分かってくれる人がいるって安心するだろう、暖かいだろう。俺はこの暖かさに救われたんだ」

俺は李鈴の華奢すぎる体を少し強く抱きしめる。

抱きしめていても李鈴の体温が伝わってくる。李鈴が何か言っているが、もう聞き取れないほど泣きじやくっているようだった。

いつまでそうしていただろう。俺達は夕日が差し込む部屋の中、泣き続けた。まるで今までためてきた苦痛を全て出すかのように。

「……待たせてるしそろそろ出たほうが良いか」

俺はそのまま立ち上がろうとすると、何か引つかかるような重さを感じた。

下を見てみると寄りかかっている李鈴を見つけた。軽すぎて少しいるのを忘れてしまっていたらしい。

ふと李鈴の顔を覗いてみるとそこには美しい寝顔があった。夕日に当てられ朱色の髪は少しオレンジがかかっていて、神々しく輝いている。

しばらく見とれてしまう自分に恥じながらも、冷静になり今この状況を思い返してみる。

——我ながら恥ずかしい事をしてしまったな。……これマジで速く部屋から出ないとまずくないか？ 今竹田医師が入ってきたら疑われてもおかしくはない。というか間違いない誤解される。

俺は起こさないように李鈴をベットに寝かすといつ視線が顔に行ってしまうのを耐え、自分の部屋を後にした。

部屋を出るとすぐ隣で腕を組んで壁に寄りかかっている竹田医師を見つける。

「えっと遅れてすみません。俺どのくらい中にいましたか？」

「おかえり。そうだな、30分くらいかな」

なんか竹田医師がいつにもましてニヤけている気がするが気の性にしておこう。

「でもその様子じゃ答えを決めたようだね。目つきも前と変わってる。何かあったかい？」

「え、ええ、まあ……はい。答えが出ました。俺はあの子を——李鈴を助けたいです。やっと手に入れた幸せを失うわけにはいきません。何としても、李鈴を助ける為なら払います」

「その意気だよ。私が君がその答えを出してくれると信じていたよ。早速手術を何時するのか決めよう。代金は終わった後で分割でも構わない」

「あ、そのことについてちよつと話が——」

俺はあの日から毎日李鈴のあ見舞いに毎日来て、ついにこの日が来た。

李鈴はベットに座って不安そうな顔をしている。当然だ、俺はこの日を待ち望んでいたが李鈴にとっては手術の日なのだ。

「怖いかな？」

「まあね……少し怖いかな。だって成功するかも分かんないし」

俺は半目にして暗い顔をしている李鈴の頭を撫でながら優しい声で、

「大丈夫。ネガティブに考えてたら成功するものも成功しなくなるぞ。俺と一緒に2時間くらいゲームしてたら終わるさ」

今日は11月6日。試作品のフルダイブ機には手術をしている間、ゲームができる機能がついている。だから、俺もゲームができるようにソードアート・オンラインのサーブিস開始日に手術をするのに決定した。

——あとソードアート・オンラインにログインできるまで20分くらいだろう。その間にできることは李鈴を元氣付けてやるだけだ。……元氣付けると行っても何をすれば良いんだ？

少し何をするべきか考えていると李鈴が恥ずかしそうに話しかけてきた。

「ねえ、今から元氣付けて貰うから少し動かないでね？」

「ん？ ああ」

何をするのかと思ったが、李鈴が希望しているなら受ける以外選択肢はない。俺は「分かった」と付け加えてその時を待った。

「少し……目を瞑っててくれる？」

——本当に何をする気なのだろう？ まあいいか。

俺は深く考えずに目を瞑った。その数秒後——お腹の辺りに温もりを感じた。

恐る恐る目を開けてみると、李鈴が俺の腰の辺りに抱きついていた。

——は？ え？

俺は一瞬動揺したが、そうかコレが李鈴なりの元氣付け方なのだ。だから問題ないと無理やり良いように解釈した。ふと李鈴が俺の手を自分の頭に付けた。細いため息をしながら李鈴の頭を撫でた。

下から「えへへーあつたかーい」と聞こえた気がしたが恥ずかしいので気のせいにした。

ようやく李鈴から開放された俺はドアに向かって歩きだす。ふと、後ろに振り返ってみると李鈴が顔を真赤にして毛布を握りしめながら俯いていた。

——流石に恥ずかしいよなあ。さつきあつたことは近いうちに忘れろとしよう。

李鈴は顔をあげるとこちらを見ている俺に気がついたようで顔を耳まで赤くしながら体がビクンツと跳ねた。しばらく動揺してたようだったが、やがて恥ずかしそうに笑いながらこちらに手を振ってきた。

俺も段々恥ずかしくなってきたので、手を振り返しそそくさとドアの取手を握った。手のひらに鉄の冷たさが伝わってくる。

——あの時と同じだ。だが、あの時と違うところがある。それは俺の気持ちだ。前よ

りも前向きに生きれるようになり、なりより李鈴とであい心が晴れた。
俺はスッキリした気持ちで部屋を後にした

第4話【デスゲーム】

病院の廊下にかツカツと音が響く。見渡す限り続く白い壁、部屋の位置を示す色付きの矢印が無ければ確実に迷う程に色の変化がない。今海斗の後ろにあるドアを除けば。

—— 空気が冷たいな。

歩いていて不意にそう思った。海斗は色に変わりがない廊下の奥を見続け、少し違和感を覚える。

—— やっぱ、慣れないな……しかし一年も片目を隠してただけでこんなに違うもんか……

ここに来る途中、散髪をし今まで伸び切っていた髪の毛をスッキリ切った。当然、片目を隠していた前髪も含めて。なぜいきなり散髪したのかというと前に李鈴とこんな事があったからだ。

「ねえ、海斗ってさ。なんで片方の前髪だけ以上に長いの？」

「ん？ ああ、ほら俺って目つき悪いだろ？ だからその目を片方だけでも隠せば少しは怖がられなくて済むかなと思つてな」

「へえ、私はそう思わないんだけど……」

李鈴がなにやら複雑そうな顔でこちらを見ていた。

「？ どうした？」

「いや、そんな理由で隠してたとは……ねえ？」

「なんだ、言いたいことがあつたら言えればいいだろう」

「じゃあ、言わせてもらおうけど。それじゃ余計怖いと思うよ」

「え？ そうなのか!？」

「うん。普通に両目見せてると片目では多分倍くらい違う。速い内に髪切れば？ 見

てて暑苦しそうだし切つたほうが見た目がスッキリするよ」

「うーん、李鈴がそう言うなら切るよ」

——という事があつたから散髪したわけだが、一年間片目を隠して生きてきたせいかなんか違和感があつて落ち着かない。まあ慣れるしか無いだろうが。

冬という事もあり、廊下は冷えている。李鈴の部屋は暖房が付いていて、少し暑いくらいだったのだが。冷えた手をポケットに突っ込み速足で歩き続ける。

歩いてから数分、目的の部屋の前に付く。相変わらず色に変わりがないドア、隣には【特別手術室】と書かれてあるだけだ。事前に受け取ったカードをかざしドアを開けると、前とは違って既に明かりが付いていた。眩しさに目を細めるがすぐに慣れ人が居ることに気づく。

普段は陽気な声で話しかけて来るくせに真剣な顔でガラスの奥を見つめている竹田医師の姿があった。俺はなんの迷いもせず話しかける。

「こんにちは。今日はよろしくお願ひします。竹田医師」

「こんにちは。海斗くん。言われなくともわかってるよ」

「どうしたんだい？ まだダイブするには少し時間が速いと思うけど。ああ、李鈴さんは少し時間を貰えなきゃダイブ出来ないから10分経つまでには間に合わせるよ」

「ああ、はい。あと、代金の方はちゃんと遅れましたか？」

「大丈夫だよ。それにしても今思えば君もとんでもないことをしてくれたよね。まさか格闘ゲーム大会に出場してその優勝賞金で払うとは……」

「あの時はありがとう御座いました」

——そう、俺はずっとどうやって払うかを悩んでいたのだ。200万という大金を

学生がバイトをしたとしてもまともに払える額じゃない。そして俺はあるチラシを見た。それは格闘ゲーム大会のチラシ。日本一を決める大会なようで、賞金は300万。俺はこのチラシを見た途端、すぐ参加を決めた。何故なら賞金は300万、払っても十分お釣りがくる額だった。なので竹田医師に頼み込み無理やり大会に出場する人を一人倒すことを条件に参加してもらえることに。だがしかし、相手は日本一の大会までくる強者。ただのゲーム好きの俺がおいそれと挑んで勝てる相手では早々ない。

だが、俺が大会に出場することを決めた理由は俺が有利な条件だからだ。

なぜ有利なのか、それは今までの格闘ゲームだったら2Dだった。だが、今の格闘ゲームは3Dなのだ。それにゲームの中に入りキャラを自分の思い通りに動かすことも出来る。当然コマンドの機能もあるが、自分の思い通りに動かすことが出来る。そう、これが俺に取って有利な条件だ。SAOのβテストに参加し一日中プレイした俺はフルダイブの慣れに関しては自信があった。

なので、恐らく他のプレイヤーはコマンドを利用し最善のコンボで戦ってくるはず。それをコンボを使わずに全くの逆転の戦い方で優勝を勝ち取るという計画を立てた。

だが、ただ単に他のプレイヤーと違う動きをしたとしても確実に勝てる道筋にはならない。なので、正直これは賭けだったのだが、コマンド以外の細かい動きも出来る事を信じて様々な事を頭に叩き込んだ。格闘ゲームの基本的な動きから現実のプロレスや

格闘技の関節技など簡単に言えば近接格闘だ。

後は受け流しとして使えるかもと剣技もついでに覚えた。とにかく戦いに役立ちそうなもの全部だ。

約束の戦いの日まで様々な技術を叩き込みついに、大会まで進んだ四国1位のプレイヤーと対戦した。ちなみに誰と戦うかはランダムらしかった。だが、他のプレイヤーはいきなり名も聞いたことのない初心者プレイヤーが挑んできたに過ぎず、誰が選ばれても反論の声は無かった。

結果から言うと、楽勝だった。一応プロのプレイヤーなので、すぐに学習され見切られると思ったので一発勝負で技を何個かといざという時のための必殺技も用意していたのだが、それを使うこと無く終わってしまったのだ。当然、この事でプレイヤーは焦ったらしい。なにせ俺の情報コマンド以外の動きをしてくる。しかないのだ。見極めようとも数が多すぎて全部見切る事は不可能。俺はコレも狙ってたわけだが、ままと引つかかってくれた。

そして、大会の日。東京の施設で行われた格闘ゲーム大会は過去最高の人数の観客となった。なにせ、意味不明な謎のプレイヤーが出場者を完膚なきまでに倒した事が広まったのだろう。

俺は大会の出場者として出たのだが、あまりの人の多さに足が竦んだりした。そし

て、大会に開始。大会はトーナメント制で8名で行われる。俺は決勝まであまり技を披露せずに戦えたのだが、決勝だけは違った。

流石決勝まで上がってやることもありかなりの腕だった。相手は関東1位。俺は臨時の参加なので何処の代表とかは無かった。関東1位。奴だけは俺が今まで使ったのプレイヤーが見切れなかった技を見切り避けたのだ。しかも俺は戦いによって新しい技を使っていたので奴は初めて見た技を避けたという事になる。戦いは3ラウンドで1ラウンドが関東1位。2ラウンドが俺と3ラウンドまで続いた。

俺はラウンド毎に技を変えて戦ってたはずなのに奴は避けて反撃をしてきた。最初、見切られた時から同じ技は通用しないと分かっていたので俺はジリジリと使える技が少なくなってきた。相手は避けられる技も多くなり追い詰められているのは俺の方だった。ただ相手はコマンド通りのコンボで攻撃してきて俺が避けて技を入れる。相手が避けるの繰り返しで少しずつ体力を減らして行くだけで残り時間ギリギリまでそれは続いた。動きは他のプレイヤーと大差はないはず。ただ単にとんでもない反射神経と速さで避けるのだ。正直今まで苦戦もせずに勝ち上がってきたため舐めていた。

そして、残り時間30秒まで続き、体力は相手の方が少し上。このまま行けば俺の負けは確実だった。

ステージの風の音が耳に響く。フルダイブしてる俺達は聞こえないがこんな戦いを披露したら観客の歓声は凄まじいだろう。

——残り30秒。体力は俺の方が少し少ない位か…正直、きついな。

俺が次の手について頭を回転してる中、相手は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、始まってから一度も開いてなかった口を開いた。

「奇妙な技を使う奴だが、まだ甘いな。そんな腕でこの大会に優勝するつもりだったなんて笑えてくるぜ」

関東1位な伊達じゃないって事か。相手はネットでも有名になっていたプレイヤーだった。噂は無敵のプレイヤーと言われる程の腕の持ち主。この大会の優勝候補としてネットを騒がせていた。

「はっ！ まだ決着はついてないのに余裕じゃないか。そんなんじや後悔することになるぞ」

「でかい口を叩ける者だな。ならば、終わらせてやろう。終わりだ。若き挑戦者よ」

相手が拳を高々と上げる。推測としてはこれからくるコンボは最低10コンボくらいだろう。賭けるしかない。今まで使ってこなかった技を使うしか無い。だが、今まで

見切られてきたのにこの技は当てやすいとは言えない。簡単に避けられるのは大いに予想できる。何か、何か空きを作れば……

「セアアアア!!」

俺は可能性に賭けて地を蹴った。意識を相手の拳に集中させ、突っ込んでいく。途端、相手が勝ちを確信したのか、これまで以上の笑みを浮かべる。

拳が衝突する刹那、俺は自分の拳を相手の腕に滑らせるように距離を詰めた。受け流しだ。相手は体制が崩れ、相手の顔が歪んだ。

何とか作った空きを無駄にせず、すぐさま相手に固技をして動きを封じる。会場に響く歓声。俺の耳にも聞こえた気がした。

そこに初めてコマンドの遠距離技を使い、相手の体力が0になると同時、制限時間も0になった。

俺の画面に「win」という文字が現れ、俺は人生で最大の叫びを上げた。

今思うとあの時、少しでも遅れていたらカウンターを食らってたかもしれない。そう思うだけでも寒気がする。かなり苦戦したが、何とか勝利し賞金を勝ち取ることが出来

た。

「全く、話をした私の苦勞も分かつてほしいよ」

竹田医師がやれやれとばかりの表情を浮かべる。

「しかし、海斗くんさあ、いつの間にか私に敬語になったよね？ 初対面の時はあんなに

手厳しかったのに」

「これは、俺なりの敬意ですよ。絶対、李鈴を救ってください。失敗なんかしたら呪います」

俺は頭を深く下げる。

「ざらつと怖いこと言わないでくれよ。言われずともつ。おつともうこんな時間か、もうそろそろダイブ出来る時間だね。それじゃ私は李鈴さんの準備をしてくるから」

そう言い、竹田医師は部屋を出ていった。どうしようか。先にダイブしているか。

やることが決まった俺は奥の部屋のドアを開けて電気をつける。部屋にはベットだけで、枕元には俺が使っているナーヴギアが相手ある。来た時に渡したはずだが、流石に仕事が速い。

俺はベットに横たわり、ナーヴギアをしつかり被る。深呼吸した後、目を閉じて言った。

「リンク・スタート！」

途端、目の前が真っ白に染まり、意識が途切れた。

再び意識を取り戻した所は青い空間だった。βテストの時と同じキャラメイキングにし、ネーム名に『シャドウ』と打ち込み、OKを押す。途端、再び目の前が白く染まった。まず視界に入ったのは漆黑に染まる宮殿。《黒鉄宮》

つまり、俺は再びこの世界に戻ってきたということだ。周りを見渡すと他のプレイヤーが続々と無の空間から現れる。俺は俯き岩のレンガ状の床が見える。そして試しに手を握ったり閉じたりしてみる。ちゃんと動く。現実より少し軽い体、段々と仮想世界に戻ってきたんだと実感し、嬉しさとワクワクがこみ上げる。

俺は拳を強く握り走り出した。

プレイヤーを避けながら街の中心の広場に疾走する。βテストである俺はこの《はじまりの街》の構造を大体理解している。そして、この《はじまりの街》はちゃんと中心に向かうよう道を辿って進めば中心の広場に出るようになっていた。

なので広場を集合場所としているが初めてログインする李鈴でも問題なく広場に付けるはずだ。

人集りを通り抜けやっとならぬ間に広場に付く。広場の真ん中には転移門と呼ばれレポート

ができる。しかし、行ったことがある所じゃないと転移できないので今転移出来るのは《はじまりの街》の近くのフィールドだけだろう。広場には人が集まっており、俺と同じ人を待っているのかフィールドに出ようとしている人達が広場に集まってくる。

竹田医師は李鈴がダイブ出来るまで10分は掛かると言っていた。ここに来るまで5分くらいかかったので10分以内には李鈴もここに来れるだろう。俺は特にやることもないので適当に暇を潰していると不意に声を掛けられる。

「あの…間違つてたらずみませんけど…：…シャドウ？」

少し心配そうに話しかけてくる人に視線を移す。黒い髪に同じく黒の瞳に初期装備のインナー部分も灰色というなんとも地味としか言いようがない見た目だった。李鈴には事前にユーザー名を教えるので李鈴が教えてくれたユーザー名なら、

「そうだよ、イヴ。というか、キャラの見た目も全部事細かく伝えてるはずなのになんで遠慮しがちに聞くんだよ…」

「そ、それだつて少しは心配するでしょ！」

李鈴ことイヴは頬を膨らませてむくと唸つてこちらを見つめてくる。俺はため息を付きながら問う。

「まあいいけどさ。…：…なんか、その格好、言っちゃ何だが、地味じゃないか？」

「だって、現実の私つて随分と派手じゃない？ だからゲームくらいは地味でも良いか

なつて」

なるほど、そういう訳か。

「ふーん。じゃあ、早速この世界について色々教えるよ。とりあえずフィールドにでよう」

俺は久しぶりのこの世界の戦闘に胸を踊らせながらフィールドに出た。

草原のフィールドにフレイジーボアの足音が響き渡る。俺はイヴに戦い方、曰くソードスキルの出し方を教えていた。

イヴが近づいてくるフレイジーボアも睨んで構えるがソードスキル独特の派手なライトエフェクトとサウンドエフェクトは発生せず、軽々と突進をくらい飛ばされる。拍子にHPが2割くらい減る。

「イヴ。大丈夫か？」

俺はイヴに近づきながら話しかける。

「うん。ほんとに痛みは無いんだね。現実でくらつたら骨の一本は余裕で折れる威力してるのに……」

「生々しい話をするな。どうだ？ ソードスキルは使えそうか？」

「うーん。このソードスキルって奴発動しにくいよ。ちゃんと構えは合ってるはずな

の……」

「さっきのは腰の高さが合ってなかったな。少しのミスは見逃してくれるが大きなミスをするとは発動できない。慣れれば体に染み付いて勝手に覚えるようになるけど」

「そこまでになるのは難しいよ」

イヴは右手に持っている細剣に視線を落とす。なぜ細剣だというと、攻撃方法が単純な突き攻撃であり素早く、軽そうだからだそう。

「普通に振ってるだけじゃ駄目なの？」

イヴが細剣を上下に振り回しながら言う。

「それじゃ遅いし、威力が出ない。慣れれば簡単だと思うけどな……」

俺がフレイジーボアに視線を抜けるとちやうどフレイジーボアが立ち上がりこちらに突進するべく地面を足で削っている。

「よし、立てイヴ。いいか？俺と同じ構えををしてみろ。上手く発動して無駄に動かなければ敵に命中するように勝手に体が動いてくれる」

イヴがわかったと言い。立ち上がり、俺と同じ、腰を落とし右手を腰の高さまで下げ、右手を突き出す。コレが基本的な細剣のソードスキルを使う細剣の構えのはずだ。イヴが構えた途端、派手な音がなり、刀身が青いライトエフェクトに包まれる。そして、突進してきているフレイジーボアに向かってちを蹴った。

いきなり動いたからか、イヴが「きゃつ」と声を漏らしたが、フレイジーボアに走り出したイヴは思い切り細剣を突き出し、フレイジーボアに当てる。フレイジーボアが細剣の先端で停止し、発光しながら四散してやがて消える。

「あ？　え？　倒…した？」

「ああ、この構えを覚えておけば後のソードスキルは手の位置を変えたりするだけだから便利だ」

自分が倒したことに実感していないのか啞然とし、やがて、実感したのか満面の笑みで叫んだ。

「やったー！！」

実はさっき倒したフレイジーボアは一番弱い雑魚だという事は言わないことにした。

そこから1時間くらい経過したか。戦っていくたびにイヴが構えを覚えてきて、戦い方も様になっていく。予想以上に覚えるのが速かった。やる前は無理だと断言していたのに、習うより慣れるのタイプなのだろう。

何体目か分からないフレイジーボアをイヴが倒し、ふうと一息。イヴの周りで速攻でモンスターを倒しまくっていた俺はレベルが3に。イヴはレベル2になった。この短時間でここまで上がるのは大したものだと思う。

流石に疲れたので大樹の下に座り、休憩する。ここら一带のモンスターを全て殲滅したので、次湧くのは数十分後なのでそれまで休憩できる。

イヴは俺の隣に腰を掛け深い溜め息を付いた。そして俺が見ていた方向に視線を向け呟いた。

「綺麗……」

「そうだろ。本当に綺麗だ」

そこに広がっていたのは絶景だった。小鳥が辺りに囁ささり、とても仮想世界とは思えない現実に近い綺麗さ。

「本当に、ここが仮想世界なのか疑うくらい綺麗」

そう囁くイヴに視線を向ける。イヴはただ優しく微笑んでいた。だが、俺は、俺には感じられた。その目には不安を抱いている目だと。

「やっぱり、不安か……?」

そう問いかけると一瞬こちらに視線を向けたが、口元を緩めて俯いた。

「……まあね。こうやってゲームしてるのも勿論楽しいけどやっぱり安心は出来ないな……」

——今、ログインして1時間くらい経っているはず。あと30分くらいか……

「大丈夫さ、あともう少し遊んでればすぐ終わる」

——ああ、人なんて褒めたこと無いから下手くそだな。

イヴはただ「うん」とだけ答え視線を景色に向き直す。

帰ったら色々勉強しないとと思う海斗と一緒に数分の時が流れる。

数分後、そろそろモンスターも再びわき始める頃。

シヤドウとイヴが景色を見るのを止め、立ち上がり次のモンスターに備えていた時。

「……？ 全然わかないな……」

「どうしたんだろ？」

時間的にはここら一带のモンスターが殆ど湧いて出てきても良いはず。

だが、周囲にモンスターの姿は微塵も見つけられない。

「変だな。バグか？」

「あれ？」

「ん、どうしたイヴ」

「今アイテムの整理しようと思つてウィンドウ開いたんだけどさ、どこにアイテム欄があるのか分かんないから適当に押してたんだけど」

「この欄のここつてさ、なんで空白で何も無いの？ コレもバグつてゆうの？」

「えっ」

そんなバカな。

イヴが指した所はウィンドウメニューの一番下の欄の下。

そこに在るべき者がいない。

「確か…そこにはログアウトボタンがあつたはずだ…」

「え!? ログアウトって私達がゲームから出ることだよ。それが無いって…」

「一言で言えば、ログアウト出来ないって事だ。発売初日に色々なバグや不具合があるのはよくあることだ。だが、ログアウト出来ないバグなんてとんでもない事になるぞ…」

他の人達も気づいている頃だろう。フルダイブに疲れてログアウトする人達も出てくる時間帯のはず。

「そうだ、GMコール!」

GMコール。それはその名の通り、ゲームマスターに不具合やバグの報告が出来る。

だが、反応は無かった。

「どういう事だ…? こんなバグ、天才プログラマーと言われた人が犯したミスとは思えない」

イヴと目が会い、イヴが付け足すように続きを言う。

「と、いうことは…もしかして——」

「!?!」

思考を回らしている途中に大きな音が耳に入り驚いて音の方向に目を向ける。

「《始まりの街》の方向だ——ん？」

突如俺の横から青い円形が浮かび上がる。

青い円形をよく映画で出てきそうな移動ポータルみたいな感じだ。

「入ってこと…?」

イヴが警戒して2歩下がった。当然だ。俺も怪しんでいるのだから。だが、
「入ってみたい事には分らない。行ってみよう」

イヴも渋々頷き俺に続きポータルを潜る。

抜けた先は《はじまりの街》の中心だった。

見渡すと周りから同じようなポータルが現れていて、そこから人が続々と出てきていくら広い広場でも大勢の人で埋められる。

周りから「なんだ?」「どうしたんだ?」などの不安の言葉が聞こえる中。
イヴも不安に襲われ俺に目で訴えてくる。

俺はイヴの頭をポンポンと叩き、安心しろと伝える。

——やっぱ周りもざわついてるよな……しかし、この状況が何時まで続くもんか……
そう思った途端、空から突然、紅いローブが音もなく現れた。

「な、何だあれっ!？」

そう一人の男の声で広場に居た全員が紅いフードに目を向ける。

間違いない。あれはGM用のアカウントの姿なはずだ。

だが、急いでいたのかあるのはローブだけで中に人は入っていない。

口という器官が存在しない紅いローブから声が聞こえてくる。

「プレイヤーの諸君。まずは初めましてかな——ようこそ、私の世界へ」

「私の名は茅場晶彦。今この世界をGM権限として操作出来るのは私だけだ」

「なっ……」

広場にいる人間が全員息を詰まらせた。ただ一人を除いて。

イヴだけは事の重要差を分かっておらず？マークが頭上に出てきてもおかしくはない。

当たり前だ。李鈴は俺にこのゲームを遊ぶためにログインしただけであり、SAOの詳細なんて知る由もない。

ましてや今、浮遊しているローブの正体がSAOの開発に関わった人間であり、ナーヴィアの基礎設計をした者だとは。

広場の音が消え、少し前に流れてた街のBGMも止まっている。

そんな様子も気にすることもなく、茅場晶彦と名乗る紅いローブは話を続ける。

「諸君は既にログアウトボタンが無くなっていてる事に気づいているだろう。だが、安心してほしい。これはバグなどではなく、SAOの仕様である」

「諸君はもう自主的にログアウトできない」

——言っている意味は大体わかった。まだ付いてくれる。だが、自分でログアウト出来ないとは言え、外からナーヴギアを外されたりすればログアウトできるはず。

そんな俺の考えは次の言葉で粉々に崩された。

「そして、外部に刺るナーヴギアを取り外し、または停止によりログアウトもありえない」

「もし、その行為が実行された場合、ナーヴギアが君たちの脳を焼き尽くし、生命を停止させる。つまり、殺すということだ」

もう広場には音もなく、驚愕の声も無かった。ただ、静かに空気が冷たくなっていく。

「また、停電などの事故を防ぐため、十分の外部電源切断、2時間のネットワークの切断は許される」

「が、ナーヴギアの分解や破壊を行った場合、君たちの脳が焼かれることになる」

「そして、今この瞬間はテレビやラジオで放送されているので知らない人間が居ないこ

ともない。安心したまえ」

「しかし、警告を無視してナーヴギアの取り外しまたはそれ以外の行為によって、およそ200名のプレイヤーが脳を焼かれ帰らぬ人になっている」

広場の空気の冷たさは最大にたっし、広場の人達は掠れた声を漏らすか苦笑いをして
いるか、俺達の様子に唾然としているか。

広場の全員がこの事実の意味が分かれていない。いや、分かりたくないと言ったほうが正しいだろう。

俺自信もそうだからだ。

「また、現実の君たちの体は2時間の猶予の内に病院や施設へ送られるだろう。なので、君たちは安心して、ゲーム攻略に励んでほしい」

ある男が茅場晶彦に問い詰めた後、確信していることが一つだけある。

それはこのゲームでHPが0になった瞬間現実の自分たちも死ぬと――。

「諸君がゲームからログアウトできる方法はただ一つ。アインクラッド第百層のボスを倒し、ゲームをクリアすること。もし第百層の最終ボスを倒すことが出来た瞬間、生き残ったプレイヤーが無事ログアウト出来ることを保証しよう」

「最後にここが唯一の現実である証拠を見せよう。アイテムストレージに入っている私からの細やかなプレゼントがある。確認してくれたまえ」

俺はアイテムストレージに見たことがないアイテムが有ることに気づき、それをオプジェクト化する。

「これは、手鏡？」

俺は不思議に思い鏡を覗いていると隣のイヴが白い光に包まれた。続いて周りの人達も光に包まれていく。

「イヴ!? なっ!?」

途端、俺の体も白い光に包まれ視界がホワイトアウトした。

すぐに光からは開放され、試しに体を確認するも特に変化は——ん? 少し身長が縮まっているような——っ!?

隣のイヴを見てみると自分の体の変化に気づいた。

隣には朱色の鮮やかな髪に薄緑の瞳、それに少し細すぎる体。

コレは正真正銘——

「李鈴?」

「海——斗?」

「なるほどな……」

いつの間にか声のトーンも変わっていて、周りの男女比も変わっている。これに関しではあまり考えたくはない。

——ナーヴギアはヘルメット状態で頭を覆っている。なのでこんなに繊細に現実の顔を再現できる。

あと一つ、ナーヴギアは初めてログインする時、何かの確認とか言って体のあちこちを触らなくちや行けない。

スマホの指紋認証の為に何回の指を押し付けるのと同じ部類だと思っていたが、こんなことも出来るのか。

恐らく、李鈴にもその動作を行ったはず。

どうやら、茅場晶彦がこの世界を操作できるのはあながち嘘ではないらしい。

広場の人達が手鏡でざわついている時にいつの間にか茅場晶彦の姿は消えていた。

少しの静寂の後、一万人のプレイヤーが理解した。この状況を。

「なんなんだよ…なんなんだよこれ！」

「ふざけんなよ!! 俺たちここからどうすんだよ!!」

「そんな…そんな…」

怒り、絶望、罵声、驚愕。

広場にいる一万人のプレイヤーが一気に自分の感情を解き放った。

イヴもこの状況を理解できたのか、それとも信じたくないのかは分からないが倒れ込

み頭を抱えて俯いていた。

俺は奥歯を強く噛み締め、拳を血が出そうになるくらい握った。

——こんなこと許されるかけがない。一人の命をまるでゲームの様に弄んで、大勢の人を殺した。

そして、何より李鈴をこんな思いをさせた茅場晶彦を許せなかった。

——落ち着け。こんな時、感情に身を任せる事がどんなに危険か俺は知っているはずだ…

俺は感情を落ち着かせ、李鈴を落ち着かせる為に近くのNPCのレストランに入った。

第5話【生き抜くためには】

外からざわざわと微かに聞こえてくる。

デスゲーム宣言を受けてから30分経ったというのにまだ広場に残っている人が居るらしい。

外の声は微かな物だが、俺達がいるレストランに比べたら大きく感じる。

俺とイヴは落ち着くためレストランに入ったものの、一言も喋っていない。

俺たち以外にレストランに入ってくる人は当然居るはずもなく、二人の沈黙の時間だけが過ぎていく。

イヴは席に着いて以降、顔を俯かせて前髪で表情が見えない。

ただ、頼んだジュース的な何かをズルズルと飲んでいただけだ。

30分もその状態が続いているため、そろそろ少しずつ飲んでいく飲み物が無くなりそう。

飲み物が無くなったらそのまま飲もうとし続けるのか気になる所だが、それまで放っておくわけにもいかない。

なんて話しかけようか迷いながら頼んだコーヒーに口を付ける。

——不味い訳ではないが……正直コーヒーと言われなかったら何だか分からんな。これから生活していくのだからせめて上手い飯にありつきたい物だ。

というか、砂糖やミルクどのくらい入れるか聞かれなかったが、そこは勝手に決められるのか。正直俺はブラック派なんだが……。

くだらない事を考えていると、イヴの方から話しかけてきた。

「ねえ……私達つて本当にこのゲームでHPが無くなったら死んじやうのかな……もう、私ここで死んじやうのかな……」

だが、30分以来の一言は、とても弱いものだった。

——嘘を言ったつて後に辛くなるだけ、すぐにバレる。

俺は意を決して本当の事を言った。

「科学的に言えば、俺達の脳を焼き殺す事は可能だ……」

俺が言った途端、再び俯いて「だよね……」と言う。

やはり、受け入れきれしていないのだろう。この地獄のような現実には。

——俺もβテストをやったが、SAOは比較的難易度が高いゲームだ。普通に慎重にやっていたとしても一回も死なない事など不可能に近い。

特に俺はスピード重視のプレイヤーだったので、他のプレイヤーの倍以上は死んだ。層が上がっていくに連れ、レベルに追いつけず死んだし、時にはゾンビ戦法もしなく

ちやいけない所もあった。

だが、情報は有り余るほどある。慎重に進めば大丈夫なはずだ。後は俺の腕次第か……。

「……俺はβテスターだから、経験もあるし仮想空間での戦闘は人一番慣れているつもりだ。絶対にイヴは俺が守る。だから、安心しろ。絶対に死なせはしない」

「……うん」

俺は心の中で誓った。

何があってもイヴを守ると。茅場の好きにさせてたまるか！

やっと見つけたんだ。自分の帰れる場所を。こんな事で死なせる訳にはいかない。

「そこでだ。まず生き抜くためにはそれなりの装備が必要だ。だから、今から俺たちはここに向かう。」

ウインドウで地図をだして、その場所に指を当てる。

「なにここ？ 森？」

「具体的にはこの森の近くの村だが、この村ではアニールブレードといって第3層までは使える武器が手に入るクエストが受注できる。細剣のイヴもそれに伴った武器がもらえるはずだ」

「このクエストは人が集まると効率さが下がるから速くいかなければならないんだが……まあ、今から走って行けば間に合うと願おう」

「詳しい話は村に着いたらしよう。今は速く村に付くことを最優先にしよう」

一旦説明を終えると俺達はレストランを後にした。

フィールドの草原を二つの影が疾走する。

風を斬る音が鳴り響き、時々ザシユ！と音がなり、青いポリゴンが四散して空中に溶けていく。

全速力で疾走して5分程度経った頃、少しでもレベルを稼ごうと一発で倒せる弱い敵をすれ違い様に倒して行っているのだ。

後もう少し。ホルンカ村まで直行——っ!!

一瞬止まりそうになるのを抑え、思考を回す。

ゴウウルフ。

そこら辺にでる狼の形をしたモンスターの長みtainなもので、たまに出現するモンスター。

こちらは雑魚とは違って近づいた途端、ターゲットされ攻撃してくる。

しかも初手の攻撃が高速で突撃系の噛み付きをしてくる厄介な敵だ。多少レアなモンスターからか、攻撃力は高く同じレベルでも体力の3分の1は持つて行かれる。

しかもレベル3。俺達と同レベルだ。

ゴウウルフの頭から少し紅いカーソルが表示されている。これは自分のレベルと同じ場合、近い場合の合図だ。

———どうする!? このまま近づけば間違いなく攻撃してくる。俺は回避できるかもしれないが、イヴは間違いなく回避はできないだろう。

今の状況で少しでも体力を減らすのは避けたい。だが、止まって戦闘するのも付くのが遅くなる。

一番いい方法———これしか思いつかない!

「失礼」

「えっ!?!」

そう言つて俺はイヴを抱き上げた。

———いわゆるお姫様抱っこというやつか。まあこれが一番持ち上げやすいし、コレしかまともには知らない。

やはり、仮想空間だからある程度軽い! これなら…!!

「うおお!!」

俺は全力でゴウウルフを大きく飛び越えた。

実はゴウウルフは敵視範囲が案外狭い。範囲に入らなければ、ターゲットにされる事は無い。

少しふらついたが、スピードを落とさずに着地し、走り出す。

どうやら格ゲー大会で色々な動きをしていたことは無駄にならなかつたみたいだ。

「下ろすの面倒だからこのまま村まで直行する」

「ええ!？」

無事ホルンカ村まで付くことができ、イヴを下ろす。

「どうした？ 少し顔赤いぞ。疲れたか？」

仮想空間では息切れは起きないはずだが……。

「大丈夫……少し疲れただけ……」

「ああ、なら良いんだが」

「とりあえず、村に着いたからクエスト受注しに行こう」

ホルンカ村は小さい村だが、鍛冶屋や宿屋など、必要な設備はきっちり整っている。

用があるのはこのレストラン風な家。

ここで間違いないのをしっかりと確認したあと、ドアを開ける。

なぜ、確認するのかというところ、リアル感を追求するためかたまに入った途端全力で接客してくる店がある。

そういう店はNPCの為か中々抜け出せず、苦労したことがしばしばあったからだ。カラントと音と共にドアを開き、中に入る。

中には3つくらい机と椅子があるが、誰も座っては居ない。

適当な椅子に腰を掛けると、奥で大鍋をかき混ぜている人がこつちに近づいてくる。

「いらつしやい。残念だけど何も無くてねえ」

「水で結構」

そう言うとスタスタと奥に入って行く。

なぜ、奥で鍋をかき混ぜているのに何も無いと言うかというところ、そこにクエストの鍵があるからだ。

ちなみにここでお構いなくなると、言ってしまうと本当に何も出てこない。本当にリアルすぎるゲームだ。

「はい。水だよ」

水を置いた途端、頭にはなマークが現れる。

クエストを開始できる印。

「何かありました?」

俺がそう言うのと顔が明るくなり、話し始めた。

同時にはてなマークが!マークに変わる。

クエスト開始された合図。

どうやら子供が毒に陥ってしまい、その子供のお母さんは頑張って看病をしていたという。

その毒を治すには村の近く森の中に現れるリトルネペントと言われるモンスターの胚珠が必要らしい。

なので、俺達にその胚珠を取ってきてほしいとの事。

簡潔にまとめたが、実際は長苦しい話を聞かされてちよつとしんどい。

スキップ機能なんかあるわけないので最後まで聞かなくてはならないのだ。

やっと話が終わると俺はテーブルの水を一気に飲み干し、勢い良く立った。

「任せてください」

そうしてレストランを後にした。

「どうした? イヴ。行くぞ」

森に入ろうとした途端、イヴが歩くのを止める。

「えへへ、ちよつといざつてなると、案外怖くなるんだね……」

俺は微笑みながらイヴの頭に手を乗せる。

「大丈夫だ。絶対に守るといったら？ イヴの命は俺が保証する」

イヴは頷く事もなく、ただ優しく微笑んだ。

俺も拳を強く握り、森へと入って行った。

第6話【迷惑なんかじゃない！】

ホルンカ村の近くの森はリトルネペントの住処になっている。

中に入ってみると案外薄暗く、昼の内じゃないと暗くてまともに見ることが出来ない。
い。

だから、速くこのクエストを終わらすために急いで来たのだ。

雑草が膝の辺りまで伸びていて、その道を無理に進むこと3分。

やつと雑草が短くなり、抵抗もなく進めるようになった。

——これはもう少し進めばネペントの出現範囲に入るな。

シヤドウがそう思い、一旦足を止める。

「よし、イヴ。もう一回確認しておこう」

「まずこのクエストはリトルネペントを倒すクエストだ。リトルといっても、1メートルは自足歩行植物だ」

「主な攻撃方法は左右の触手による攻撃、弱点である口からの毒液攻撃。これは斬ることも出来るが、素人がやると大変な事になるから素直に避ける方がいい」

「クエスト達成方法はネペントの胚珠の手に入れること。胚珠は花付きのネペントから入手できる。間違っても実付きは倒さないように」

「だが、花付きのネペントが出る確率は100分の1。効率化のため、ある程度離れて倒していこう。花付きが出たらすぐに俺に知らせること」

「ここまでわかったか?」

隣で話を聞いていたイヴが頷く。

「よし、じゃあ早速倒していこう。暗くなる前に終わらしたい」

そして、ネペント狩りが始まる。

ネペントのレベルは平均3。偶に低い奴や高い奴が居るくらい。気をつけていれば別に苦戦する相手ではない。

俺はネペントの出現範囲に入りイヴと少し距離を置く。

ジャキツと音を鳴らしながら背中の剣を抜き、いつ出てきても良いように臨戦態勢に入る。

「……いた……」

目の前に丁度2体のネペントが沸いて出て来る。白い体に足は植物の根つこの様に伸びていて這いずりながら進んでいる。

根っこ付近から左右に伸びる2本の触手。先端は葉の様になっている。

そして、大きく裂けた人間の唇のような巨大な口。

残念ながら頭の天辺には何も生えていない。

「ハズレか……まあ、最初に見つかるわけ無いわな……」

「ふっ！」

口を意識を集中させ、地を蹴る。

——まずは、2体のネペントの距離を離す。2体同時に相手するのはデスゲーム化したこの世界では茨の道だ。

俺は慎重に近づき、1体だけにターゲットされるように近づく。

「よし、そのままこっちにこい！」

ネペント同士の距離を置き、今もなを這いずりながらゆつくりとこっちに近づいてきている。

そして、口に向かってジャンプをして一気に距離を詰める。

ネペントが口から毒液を吐き出し、球体になって攻撃してくる。

「そんなの……！ 読めてる！」

俺は垂直に毒液の球体を斬った。

斬った毒液が服に掛り、じゅわつと消えていき、体力が少し減る。

俺は舌打ちを鳴らしながら空中でソードスキルの構えを作る。

途端、刀身が音を鳴らしながら青いライトエフェクトに包まれる。

そしてネペントに口にV状に斬りつけた。

片手剣垂直2連撃ソードスキル。《バーチカル・アーク》

さっきの2発で体力が無くなったネペントは透けていきやがて四散しながら消えていく。

左手を地面に付けながら着地し、2体目のネペントに視線を移す。

ネペントが右触手で攻撃してくる。

俺は腰を落とし、右手の剣を後ろに回す。

それと同時に誰かから背中を押されたように地を蹴り、そのままのスピードで走り出す。

俺は青く輝いている刀身に目を向けず、攻撃してくる触手の先端をじつと見つめる。

さっき発動した単発ソードスキル《ホリゾントル》は対象を水平に斬りつける。

俺は右手にぐっと柄を握り、上半身を少し捻る。

触手に滑らせるように斬りつけ、抵抗を抑えて受け流す。

結果、斬られた触手は横の部分に少し切り口を入れるだけに留まった。

ソードスキルが終わった事でスピードは落ちたが、変わらずに走り続けられている。

ネペントが俺に向けて毒液を吐こうと口を大きく開ける。

「いい加減、お前の攻撃手段は単純すぎるっ！」

俺は毒液を吐くよりも前に口に向けてソードスキルを発動した。

空中で動きが加速し、そのままネペントの口を突いた。

片手剣基本突進ソードスキル。《レイジスパイク》

ネペントは奇妙な声を上げながら四散していった。

—— 空中の的にも有効だから、《レイジスパイク》を選んだが、当たりどころが良かったか……。

俺は2体のネペントを狩り、周囲に敵がいるか見渡す。

周りをよく見ると、人間の足跡や木についている切り口を発見した。

—— やはり、数人はここに来たか。まだ、近くに居るかもしれないが、上手いこと入れ違いになってると助かるんだが。

などと思わしてそろそろ次の獲物を探しに行こうとした時、左上の体力バーが一つ黄色まで落ちている事に気づく。

当然、俺ではない。という事は……。

「……イヴっ！」

俺は無我夢中で来た方向に引き返した。

~~~~~

やっぱり、一人で倒せると言ったのは間違いだった。

イヴは体を持ち上げてそう思う。

目の前にはリトルネペントと呼ばれる植物系モンスター。

左右の触手はうねうねと気味悪く動き、今にもこちらに攻撃してきてもおかしくない。

今回の作戦は元々シャドウは反対していた。

理由は言うまでもなく、イヴが一人でリトルネペントを相手するなど、危険過ぎると判断したからだ。

だが私ははシャドウに迷惑をかけないため、この世界にだいたい慣れたことを説明し、何とかシャドウは許してくれた。

その時私はこう言った。

「そんな心配ないよー。さっきの戦闘でだいたい仮想世界にも慣れたし、ソードスキルの発動方法も大体覚えた」

「しかもネペントっていうの私達と同じレベルでしょ？ だったら大丈夫よ、さっきのイノシシのように倒せるわ！」

そんな事を言い放ち、シャドウはかなり渋々そうな顔で頷いたのだ。

今になったらそんな事を言った過去の自分に悪口の一つでも言つてやりたい。

本当はそんな単純じゃなかった。

攻撃方法は教えて貰ったけど、何処に来るかわかんないし、何とか避けるので精一杯。元々私は長い間、入院していたから最近体を動かしただことなんて無かった。いきなり動いても疲労しきつた体が前のように動くはずもなかった。

いきなり出会ったネペントに苦戦している間に後ろからもう1体のネペントが来て挟み撃ちされた。

——シャドウはMMORPGは数が脅威になるから絶対に一人で2体以上を相手にするなつて言つてたけど、これじゃまんまとしてやられたつて感じじゃない……。

何とかして避けながら近づき、口に細剣基本ソードスキル《リニア》を当てられて倒すことが出来たが、流石に2体目はそう上手くはいかなかった。

しかも、何回か攻撃を食らつてもう体力は半分きつていて、そのせいで余り思うどおりに動けない。

——シャドウはこの世界は痛みは無いとか言つてたけど、なんか攻撃食らつた部分が痺れてくるし、なんか重い。確かに痛みは無いけどこれじゃあつ……！

瞬間、イヴの頭の中にこれまで考えることを避けていた一言が浮かんた。

このままじゃ……死ぬ。

死に対する恐怖。それが今までイヴが思考していた頭の中をその一言が埋めた。

——死ぬ……このままじゃ、本当につ！ シアドウが助けに来てくれる？ ……わ

けがあるはずがない。シアドウも私と同じように戦ってる。私を助ける暇なんか……。

そんな事が頭をよぎり、イヴの頭を恐怖で埋め尽くしていく。

段々と負傷していた部分の痺れが消えて、代わりに体が凍るように冷たくなる。

指や腕が痙攣し、やがてイヴはその場に顔を隠すようにしやがみこんでしまう。

イヴは自分が自殺をしようとしていたのが嘘に思える程、死に対する恐怖がある事に気がついた。

何かしないといけない。

そんな事はもう考えてはいるが、行動する勇氣も氣力も無かった。その分恐怖があったからだ。

既に右手に持っていたはずの細剣は地面に落ちていて、剣の腹に反射してこちらに攻撃をしようとしているネペントの姿が目に入った。

「あ……あ……」

ネペントなどのモンスターはA I。

イヴがどんな状況だろうと、プレイヤーに攻撃を仕掛ける。奴らにはそうゆう命令が

下されている。

待つてくれるはずもない。

イヴは細剣から目をそらし、目をギュツと瞑った。

そして、この世界で一番信頼している名前を言った。

「……………助けて……………海斗つ……………」

触手がイヴに高速で近づく。

瞬間、イヴは死ぬ事を覚悟した。

だが、イヴに触手が当たるとは無かった。

「……………えっ?……………」

まだ声が思うように出ず、かすれるような声を漏らし、顔をあげる。

そこには自分に数センチの所で留まっている触手とそれを掴んでいるシャドウの姿

があった。

「海斗つ!」

イヴは喜びの声を上げた。

~~~~~

間一髪。

俺の頭の中はその一言と間に合った喜びがあった。

何とか触手を掴むことができ、イヴに当たるギリギリに間に合った。

——普通にそのまま斬れば良かったのに、掴んでしまうと焦りからか……注意しなければ。

俺はネペントの案外ある力に顔を歪めて必死に止める。

右手の剣を振り上げ、触手を垂直に切り裂く。

「あぶない……筋力パラメーターがギリギリだった……何とか止められたが」

「海斗……」

「イヴ、下がれ。ここは俺がやる」

イヴは頷く事もなく、無言で下がる。

俺は目の前にいるネペントをにらみ、怒りに任せて突っ込んだ。

「はああ!!」

口を垂直に斬り、ネペントが透けて四散していく。

怒りにまかせて突っ込んだことで、何をしたのか余り覚えていないが、倒すことが出来たらしい。

俺は剣を背中に収め、イヴの方に歩く

「助けに来てくれたんだ……海斗」

イヴが震える声で言いながら立ち上がるうとして、後ろに尻もちをついた。

「えっへへ……なんか腰が抜けちゃった……」

「大丈夫か？」

俺は肩を貸し、イヴを立たせる。

「しかし、やはりイヴ一人では危険だった。イヴ、今すぐに村に帰るんだ」

「え？ それじゃあ……」

「んっ!？」

シャドウの迷惑になる。と続けようとした途端、口を塞がれる。

そして、両手をイヴの肩に乗せる。

「お前はまだ迷惑、迷惑言ってるのか？ 俺は今までイヴに迷惑を掛けられた覚えはな

いし、迷惑を掛けてもない！」

「だが、コレだけは肝に命じる。イヴが唯一俺に迷惑を掛けることは、お前が死ぬことだ

!!」

「イヴが死ぬことが俺に取つての迷惑だ！ だからもう諦めるんじゃない。俺に迷惑を掛けたくないんだろう？ だったら死にそうになっても逃げたりして足掻いてみせろ

!!

「…………ごめんなさい…………」

「——こんな真剣な海斗の顔、初めて見た…………」

「すまない、取り乱した。わかればいい。イヴこれを飲んで今すぐ村に戻るんだ。胚珠は俺がやっておく。夜までには帰るから待ってろ」

「うん」

俺が渡したのは回復ポーション。

イヴはそれを飲み干し、段々と体力が回復していく事を確認すると、気が抜けた。

「はあ…………俺としたことが、どんな事があってもイヴを守ると誓った矢先に…………」

「シャドウのせいじゃないよ！ 私が無理に頼んだから…………」

「いいんだ。それを断りきれなかった俺も悪い——っ！」

俺はそう言いながら振り向くとネペントが近づいてきているのが分かった。だが、

「花付きだ…………」

「えっうそ!？」

イヴも俺の横から花付きをみて「おおー」声を上げる。

「——おかしい。今までβテストでも花付きは2体のネペントと一緒に行動しているはず。なぜ花付きだけなんだ…………? 仕様が変わったのか? いや、それじゃあ

……。

そんな事を思考していると、答えはすぐ出た。

なんとネペントが奇妙な咆哮を上げながら、体が発光し始めた。

まさかと思ひ、

「イヴ……今すぐ村へ帰れ……」

「え？」

「速くしろっ!!」

「は、はいっ」

イヴは怒鳴りつけられると素早く村の方向に走っていった。

——まさか……ある噂を聞いたことがある。極稀に花付きが単体で出てくる時がある……。だが、元々の確率が低い分、 β テスト時には噂ぐらいで調べても一切情報が出てこなかった。

だから、たかが噂だと決めつけていたが。

発光し始めたネペントが光から開放される。

体は元のネペントよりも大きい。

白かった表面はドス黒い赤に変わり、真つ黒い斑点が体中に出来ている。

左右の触手は細くなり、先端は尖っていて、弱点である口は一回りくらい小さくなっ

ていた。

そして、頭の天辺の花。変化前は綺麗と呼べる花だったが、こちら黒く染まっ
ている。

「いわゆる……特殊个体ってやつか」

途端、ネペントが威嚇するかのように奇妙な咆哮を上げた。

周りの草木が大きく揺れ、近くにいた動物達も逃げていく。

「戦うしかない……かつ」

俺は奥歯を噛み締めながら背中中の柄を強く握った。

第7話【命を賭けた戦闘】

風で周りの草木が揺れて音を醸し出す。

その音に対抗するかのように巨大化したネペントの咆哮が重なる。

「ぎしやあああああ!!」

「うるせえな……さっさと片付けてやる」

俺は刃物が擦れる金属音と共に背中の中の剣を抜く。

ネペントも臨戦態勢に入り、細くなった左右の触手を後ろに引く。

「だっ!」

俺がソードスキルを発動して地を蹴るのとネペントの触手が突っ込んできたのは同じだった。

だが、細くなった触手の速さは変化する前とは見違えるほど速くなっていた。

——速いっ!?

細くなっているので、さっきみたいに受け流しは使えない。

だとしたら、垂直に斬るしか無いわけだが、正面から来る触手を垂直に斬ることなど不可能だ。

そう思っている間に触手は近づいてきて、ついに俺の体を貫通した。

「あぐっ!! ちいー!」

2本の触手が一本は頬に掠め、もう一本は腹部に突き刺さっている。

刺された衝撃に必死に耐え、何とかソードスキルが中断される事は無かった。

せめて一本は……と思いい、頬に掠めた触手を斜めに切り裂く。

片手剣単発斬り。《スラント》だ。

そして、腹部に刺さっている触手を斬る。

途端、腹部に刺さっていた触手は消滅していく。

2本とも先端が斬られ、一旦触手が持ち主の所に帰っていった。

その空きに左上の体力バーをチラリと見る。

細くなつて速さも増したからか、細さに見合わず威力は高かつたらしく、三分の一は

削られていた。

「……*eeeeen*」

ネペントがこちらを睨み、奇妙な声で威嚇している。

そして、いきなり上を向き、口をがばつと開いた。

チャンスと思いい、走ろうとしたが、次の瞬間、直ぐに足を止めた。

そして上を向いていた。

ネペントの口から毒液の球体が空中に放ち、一定の高さ、俺の居る当たりで爆発した。「なっ!?!」

爆発した毒液は分散して俺の所に振ってきた。

上から降ってくる毒液を回避する。別に避けられない速さじゃないので簡単に避けていると、あることに気がつく。

周りを見ると地面に毒液が所々に落ちていて、消えること無く存在していた。

つまり今この瞬間から、俺の移動範囲が急激に制限された。今の体力じゃ毒を食らったら致命傷になりかねない。

——モンスターのAIにしては見事な戦略だ。まんまとハマられたか……今触手が来たら不味いな。

当然、ネペントが待つてくれるわけもなく、俺に向かって再び左右の触手が高速で攻撃してきた。

これは少し捌くのが大変そうだ。

だが、てつきり左右別々に攻撃してくるかと思いきや、左右の触手同士でクロスするように俺に攻撃してきた。

なぜだと思ったが、冷静に背中を少し後ろに倒し回避する。

簡単に避けられ左右に進んでいく触手。

だが、次の瞬間——ある程度進んだ触手がグリンツとこちらに引き返してきた。思わず顔を引きつらせ、左右から向かってくる触手をどう対処するか頭を回転させる。

——どうするツ!? 片方は対処出来るかもしれないが左右両方は無理だ!

考え抜いた結果、一番の対処法は更に背中を後ろに倒して両方避けることだった。

だがそうすると自然と体勢を崩し、後ろに倒れる事に——っ!

俺は後ろの光景に思わず息を飲んだ。

気にしていなかったが、後ろには確かにさっきの毒液で小さい毒沼が出来上がっていた。俺が倒れる位置に。

そうか、ネペントは最初からコレを狙って……!

俺は咄嗟に手が届く事を祈って毒沼の外に手を伸ばした。

ギリギリ手が届いたことに安心して、右手に精一杯力を入れる。

同時に足で思い切り地を蹴って体を浮かせて毒沼を飛び越えた。

俺が体勢を崩し毒沼の外で倒れ込んでいるのと同時に毒沼に2本の触手が派手な音を出して突き刺さった。

地面が割れて触手が突き刺さる。先端部分は斬られて無くなったとゆうのになんて威力だ。

もう少し回避するのが遅かったら毒を食らった挙句、さらに触手に攻撃されただろう。

そうなったら流石に体力が無くなる。無くならなかったとしても毒で死ぬだろう。

そうなりそうだった事を思うと背中にゾツと寒気が走る。

舌打ちを鳴らしながら体を起こそうと顔を上げた瞬間。

目の前に毒液の球体が迫ってきていた。恐らく俺が毒沼から逃れた時にネペントがプレス攻撃をしてきたのだろう。

俺は四つん這いのまま右にステップして何とか回避する。

俺ぐらいの身長くらいある毒プレスが俺の横で通過する。

二〜三回回転した後、右手で地面を思い切り叩き、飛び上がって着地する。

いつの間にか息も荒くなり始め、余裕が無くなってきた。

さっきの毒液をばら撒いてからの俺を毒液に落とす、それを回避した時の為のプレス攻撃。

これまでのコンボを考えるととてもモンスターのAIとは思えないくらい完璧な戦術とコンボだった。

俺も手が届いていなかったら今頃死んでいたかもしれないのだ。

「特殊個体だけでコレほど頭が良くなる物なのか……？」

ネペントが再び威嚇の声を上げながら触手をうねうねさせている。もうここまで来ると次なにをしてくるかなんて検討もつかない。

しかし、今現在も毒沼によって移動できる範囲は制限されている。また先程のような攻撃をしてくるかもしれない。

次同じ攻撃が来たら今度こそ回避出来るかわからない。

だとしたら、一刻も速く決着を付けたほうが良い。

俺はソードスキルの構えを取り、地を蹴った。

この攻撃に全てを賭ける！

俺がソードスキルの効果もあつてか高速でネペントに距離を詰める中、ネペントも高速で触手で攻撃してきた。

左右の触手同士の距離が開いている事から、恐らく腕狙いだろう。本当に何処までA Iが発達しているのか。

今度は無理に避けるつもりなどはない。なんとたつて次は無いのだから。

俺は右腕だけには当たらないようにして左にズレながら走る。

左にズレた事により、右腕を習っていた触手は少し掠める程度で済んだ。

だが、ズレた影響で左腕は根本から斬られてしまった。

「……………ッ!!」

左腕が無くなった事により、激しい衝撃と痺れが体を襲う。

一瞬視界がハイライトしたが、何とか走り続けた。

左腕がなくなつてバランスが悪くなり少しフラフラしてしまう。

だが何とか走り続け、ついにネペントの口に剣が届く所まで来た。

「うおおおッ!!」

口にめがけてジャンプし、まず垂直に斬り下ろしからの斬り上げてV字のような軌跡を作る。

片手剣2連撃斬り。《バーチカル・アーク》

ソードスキルが発動し終わり、そのまま着地する。

ソードスキルを2連撃当てた程度じゃまだ倒せない。

なので——!!

次の攻撃に移ろうとした瞬間、ネペントが最後の抵抗を見せた。

「ギャアア——ッ!!」

「なっぐっ!!」

口から鼓膜が破れる程のバカでかい音量の咆哮が鳴り響いた。

爆音により、一定時間プレイヤーの自由を奪う《バインドボイス》だ。

俺も耳を塞ぎたくなるが、左手は無いため耳が塞げない。

仮想世界だから現実世界の鼓膜には何ら影響は無いだろうがそんなの関係なしにただ単にうるさい。

ネペントの抵抗により体がふらつき始め、意識が遠くなりそのまま倒れそうになる。だが、何とか意識を持たせ、踏みとどまる。

そのまま上を向き、ソードスキルを発動させた。

刀身が青いライトエフェクトに包まれ、ネペントに突き刺さりながら口ごと垂直に斬り上げた。

片手剣単発垂直斬り。《バーチカル》

ソードスキルが終わった事で刀身の光が薄れていく、刹那。

再び刀身がライトエフェクトに包まれ発光する。

俺は口に右上から斜めに斬り下ろした。

流星に体力が無くなったネペントが咆哮と共に欠片となって消えていく。

俺は剣を離し右手をつけて着地した。

ソードスキルにはそれぞれ硬直時間とクールタイムが設定されている。

単発スキルはクールタイムも短く、硬直時間も存在しない。

2連撃から硬直時間があり、連撃数が増えていく毎に硬直時間は増えていく。

当然クールタイムも同然に増えていく。

硬直時間はソードスキルによって例外はあるが、大体そんな感じなのだ。

そして上手く使えば、単発ソードスキルだけで連撃が続けられるのだ。

バインドボイスで邪魔が入ったものの、単発のソードスキル二種類に2連撃のソードスキル。

コレで実質擬似的な4連撃が作れる。

ただし、コレにはソードスキルを最低でも三種類は使うため、クールタイムによって次に使えるソードスキルが制限されてしまうのが弱点である。

そして、コレを行うにはソードスキルが終わった後のすぐに次のソードスキルの構えを取る必要がある。

感覚が難しいソードスキルは初心者には扱いが苦労する。

なので、この小技が出来るのはβテスターくらいだろう。

何とかネペントを倒した俺はゆっくり立ち上がった。

落ちていた剣を背中のお鞘に収める。

今すぐ休みたいがここはまだモンスターが出るフィールドだ。

油断は出来ない。直ぐに村へ帰ろうと村の方向へあるき始める。

体力を見てみるといつの間にかレッドゲージ付近まで達していた。

左腕を切断された時のダメージは相当なものだったらしい。

最後にアイテムウインドウにネペント胚珠があることをしっかりと確認し、村へ歩く速度を上げた。

第8話【死闘の果てに】

ホルンカ村に綺麗な夕日でオレンジ色に染まる。

アインクラッドは層になっているので、空は次の層の地面に擬似的な空でしか無い。

だが、ホルンカ村は層の端に近い部分にあるので、層の間から夕日が差し込んでいて、一段と綺麗だ。

本当にここがソードアート・オンラインの中で体力が無くなったら現実の自分も死んでしまうデスゲームじゃなかったら素直に喜べたのに。

そんな中、イヴは村の入口付近に体育座りでシャドウの帰りを待っていた。

私が村に帰ってきて、シャドウの帰りを待っていること30分。

未だに帰ってこないで、しかももう太陽が落ちて夕日が出てきている。

まだ帰りが遅いくらいだったなら長引いているのかな？　と思えるのだが、今は違う。

今私はシャドウとパーティーになっているので、シャドウの体力が見える。

さつきシャドウの体力が一気にレッドゲージ付近まで落ちた時は夢を見ているのか
と思った。

もういつそこの事自体が夢だったらどんなに良いだろう。

シャドウが命を賭けて戦っているのに私は安全な所で帰りを待つしか無い。祈ることしか出来ない。

そんな自分に怒りを覚える程に悔しかった。

自分ももっと上手かったらシャドウと一緒に戦えるのに……。

シャドウは必死に私を守って私に危険が及ばないようにしているのに。

いつかこのゲームで死ぬ時が来るのなら、シャドウと一緒に死にたいというのは我儘だろうか……。

シャドウが私の事を助けてくれた時からなんでだろう……胸が苦しいのは。

助けてくれたシャドウを見た時から苦しい

きつと恐怖からだ。あの時、私はシャドウから離れるのを躊躇った。

シャドウが死ぬのではないかという恐怖で胸が苦しいんだ。

この村に来てからも収まらなくて、シャドウの体力が減っていくたびに苦しさが増している。

きつと私は怖いんだ。シャドウが死んでまた一人になるのが。

シャドウは命がけて私を守って戦ってる。これが続いたらいつかシャドウは私を守

るために死んでしまいかもしれない。

怖い。苦しい。痛い。

胸が苦しいし痛い。

一分一秒でも速くシャドウの顔が見て安心したい。

そうすればきつとこの胸の苦しみや痛みも消える……。

私が腕に顔を埋めてじつと待っている時、私は思い切り顔を上げた。

微かに、たしかに聞こえた。草を踏む音、こちらに歩いてきている音。

シャドウだろうか……？

音が聞こえた数秒後、森の奥から姿を表した。

「え……う？」

私は思わず声を漏らしていた。

森の奥から出てきたのは戦闘で傷ついたシャドウだった。

私が声を漏らしたのはその見るのも痛々しい姿だったからだ。

顔の右頬には赤いダメージエフェクトの傷口が出来ていて、体の至る所に同じような

傷が出来ている。

腹部には突き抜けたのか丸いダメージエフェクトが出来ている。

それに加えて装備もボロボロでついてあった胸当ては無くなっていた。

そして何より——左腕が根本からばっさり切断されていた。

痺れと重みが体に負担を掛けているのか、右手で根本を抑えてズルズルとゆっくりこちらに近づいてきている。

焦れつたくなって私は村の門から出てシャドウの所まで駆けた。

「シャドウー！」

近づいてくる私に気づいたシャドウは私を見た後、口元を微かに緩めて脱力したようにながくと倒れそうになる。

倒れそうになる所を私が受け止めて何とか支える。

「大丈夫っ!? てゆうか腕は……」

「ああ、少し戦闘でしくじってな」

声もいつものようにハリを感じられない。

相当疲れているのだろう。

私に抱きつくように寄りかかる。

仮想世界でも微かに人の体温を感じる。

——なんで……収まらないの？

まだ胸が苦しい。

収まるどころかどんどん強くなっているような……。

喜びからだろうか。それとも自分の為にこんな姿になっているシャドウに申し訳ない気持ちからだろうか。

自然と発した声も震えていた。

「こんな……私の為に……っ」

「おいおい、泣くなよ……」

「本当に、帰ってきてくれてよかった！ 一時は本当にシャドウが死んじゃうのかと……っ！」

「こんな所で死ぬるかよ……だが、思った以上に疲れたみたいだ」

ため息を付いた後、限界が来たのか、私に体を預けてくる。

それに伴いシャドウの重みと感じる体温も増していた。

ああ、やっぱり安心するな……。

私は優しく微笑んで肩を貸しながら村に入っていた。

さつきまで感じていた胸の苦しみか痛みか分からない違和感は既に消えていた。

私たちはホルンカ村の宿屋に居た。

疲れきったシャドウを休めるために胚珠は取れたらしいが、明日にして今日はもう休むことにしたのだ。

ホルンカ村は小規模なものの生活に必要な宿屋などはしっかり完備されていた。

部屋は木製の小さい机と椅子が一つ。下には丸いカーペットが敷いてあり、そしてベットがあるのみ。

窓は無いのは残念だが、贅沢は言ってられない。

シャドウをベットに寝かせ、毛布を掛けてやる。

「ごめんねー、まだクエストクリアしてないから手持ちのコルじゃ一人分しか取れなくって」

「じゃあくエストクリアしてからでも良かったんじゃ……?」

「駄目だよっ！ 頑張ったんだからしっかり休まないとっ」

「だが、このベット一人用だぞ？ イヴは何処で寝るんだ？」

「私は適当に床で寝とくからっ」

「だめに決まってるだろっ!? それなら俺が床で……」

「あーもうっ！ 私のことは良いから速く寝て！」

私はシャドウが喋り終わる前に体を起こしたシャドウを再び寝かせる。

やはり疲労には勝てないのか、段々と目が細めていき、やがて目を閉じた。「寝たかなっ？」

シャドウが寝たのを確認すると、私は床で寝ようと体を起こそうとする。

シャドウはああ言っていたが、元々私を助けてくれたのもシャドウだし、胚珠を入手したのもシャドウ。

私は今回、村で祈っていただけだ。せめてゆっくり寝かせてあげて当然だろう。

そう思うと私は体を起こそうと……………。

ふと、何かに引っかかり、体が止まる。

なんだろうと後ろを振り向くと、シャドウが私の手首をガツチリと掴んで寝ていた。

「ちよつと、シャドウ？ んんん！ はあ……………」

私がシャドウの手首を掴んで引っ張って離そうとするも、筋力でシャドウに勝てるわけがなく、びくともしない。

しかも、シャドウがベットの端に左肩を上して寝ているので、腕の長さに床で寝ることはできなさそうだ。

「もう……………どうしろつてのよ……………」

私はシャドウの方をじつと見て呟くと、固まった。

それはシャドウが肩を上にして寝ているため出来たスペース。それは私が丁度入れ

るくらいの大きさだった。

床で寝れない私は何処で寝る事が出来るのだろうか。まさか立って寝ることなど出来るわけがない。

そうすると残るは………シャドウが作ってくれたスペースで寝ることしか無い。

「本当に……寝ろって言うの……？」

私は後ずさろうとするも、腕を掴まれていることに気づき、諦める。

別に嫌なわけでは無いはずだ。

……ただ、異性と一緒に寝るなんて初めてだから少し緊張しているだけだ。

……多分。

こうしてる間にも睡魔が私を襲ってくる。

現実世界ではいつも速く寝ていたので、今の時間にはもう寝ている頃だった。

意を決して入ることにした。

シャドウに掛かっている毛布をゆっくり持ち上げ、まず片足を毛布に入れ、その後も一つの足を入れる。

シャドウが既に寝ているためか、毛布の中は暖かく、昼間の恐怖で冷え切った体に滲みる。

そのまま体を入れ、一息つき寝返りを打つと、シャドウの顔がドアアップに視界に入っ

てきた。

「?!?!」

布団に入る事で完全に忘れていた顔が横にある事に驚いた私は思わず声を上げそうになるのを両手で口を塞ぎ必死に抑えた。

それは鼻と鼻がくつつきそうになる程の近さで……!

私は耐えられなくなり、頭ごと毛布に入った。

息を吐き、自分の心臓が暴れて居るのが分かった。

いつの間にかさっきの胸の違和感も復活していた。

何なのだろう。この胸の違和感は。

胸に手を当てると心臓が暴れているのが分かる。

——何か変にドキドキしてる……う？ いやこれは異性との初めて一緒に寝ることにドキドキしてるに決まってる!

と無理やり自分に言い聞かせ、視線を目の前に移すと、そこにはシャドウの上半身が見えた。

私の小さい体よりも何倍も大きくて、頼りがいのある体。

森の時も私を救ってくれた時のシャドウの背中中は頼りがいがあった、安心した。

そう思いながら私は上半身に近づいていき、少し、ほんの少し寄り添った。

少し寄り添っただけでとても安心した。

今日は私の人生で一番最悪な日になると思うけど、そんな事を今だけは忘れる事ができた。

仮想世界でも微かに寄り添っているだけでもシャドウの体温が感じられる……。それは安心するとともに眠気も強くした。

——今日は色々あつて最悪な日だろうけど、こんな風に寄り添って寝れたなら良いかな……!?!?

途端、私は上半身に寄り添っていた額をがばつと上げ、今の状況を改めて理解した。段々奥底から恥ずかしさが溢れて自分でも何をやってるんだろうと思う。

耳まで赤くなるのを感じ、私は肩を小刻みに震わせていた。

——こんな事になったのも、こうなるように仕向けたシャドウの性だ!

私は右手を振りかぶり、シャドウの上半身を叩こうと……。

した所で自分にバカバカしくなり、力が抜け、振りかぶった手はぼすつと音を立てるだけに終わった。

私は顔がまだ赤いのを感じ肩を震わせて、

「~~~~~もうっ!」

私は薄暗い部屋の中で小さく叫んだ。

だが、イヴは気づかない。

もう既に右手が開放されている事に……

第9話【胸の奥の知らない気持ち】

朦朧とする意識の中、俺は目を覚めた。

小さい部屋に一つしか付いていない窓は寄りにもよって机辺りに陽の光を当てていてた。

俺は腕をゆっくり上げ、指先を軽くスライドさせる。

出てきたウインドウの時計を確認すると、12時15分と表示されている。

どうやら少々寝すぎてしまったらしい。陽の光が当たれば眩しくて目が覚めたかも知れないのに……。

俺は上半身を上げ、違和感に気づいた。

一つは昨日まで無くなっていた左腕の復活。

これは分かっていたので良いのだが、何故か俺の隣でイヴが寝ている。

しかも俺に寄り付いて。

何かをやってしまったのだろうか、俺は。

いや、兄弟であり得ないし、そんな事をしたのなら、とうとう自分に失望して死にたくなる。

俺は必死に昨日の事を思い出す。

確か、俺は疲れてベットに寝ようとしたらイヴが床で寝るとかいい出したから俺はそれを止める一心で——ああ、なるほど。

やっと昨夜自分が腕を離さずに寝てしまった事を思い出し、ホッと息を吐く。

俺はふと、イヴの顔を見る。

昨日の泣いた後も薄っすらわかる顔もとても可愛らしく、見てるだけで癒されると言うのはこの事だろう。

俺は優しく笑みを浮かべながら、イヴの頭を優しく撫でた。

手が触れた瞬間、ビククリしたのか頭がピクンと跳ねるが、すぐに口を緩ませ、にへえと笑った。

——俺は、この笑顔を決して壊してはならない。どんなにこの先辛いことが有ろうとも、苦しむのは俺だけで良い。

イヴにはこんなデスゲームの中でもいつも見たたく笑って過ごしてもらいたい。絶対にイヴを死なしてはいけない。俺の命を懸けてでも。

俺が真剣な顔で考えている中、イヴの瞼が震えて、やがて目を開けた。

慌てて顔を緩め、微笑んだ俺とイヴの目が合った。

一瞬の静寂。

やがて、イヴが状況を把握したのか、頬を朱色に染めて、

「きやあー！ー！！」

「なんだと!？」

全力で俺にビンタしてきたイヴの手を俺は頬に当たる寸前で止めた。

ホルンカ村のレストランにて。

朝になってクエストをクリアして俺達はアニールブレードを報酬として手に入れ、イヴは細剣のウインドフルーレを手に入れた。

二つとも強化すれば第3層までは使える武器なので難しくても取っておいて損は無かったはずだ。

そして今現在、クエストもクリアしてコルも稼いだという事で、お腹も空いたので何か腹に入るものを食うことになった。

俺は出てきたグラタンらしき食べ物を口に頬張りながら口を開く。

「で、なんでいきなり俺にビンタしてきたんだ?」

俺が問うとイヴは頬張るのを止め、俯いた。

前髪で表情は読めないが、微妙に顔が赤くなっているような……？

「……………えつと……………あの……………その……………」

もぐもぐ口を動かしているようだが、全く聞こえない。

「まあ、言いたくないなら良いけどな」

「……………ごめんなさい」

「別に謝らなくてもいい。《圈内》だから体力は減らないから当たっても大丈夫だったし」

「俺も反射的に受け止めてしまったしな」

そう言うと、イヴは楽になったのか、顔を上げ微笑むみながら、

「ていうか、虚ろ目で完全な不意打ちだったのに受け止められるのは凄いや……………」

「そうか、ピンタの軌道を瞬時に予測してそれに従って受け止められると思うが」

「凄いやつ、凄すぎるよ!？」

「ま、こんぐらい出来ないと日本一を決める格ゲーの大会で優勝なんて出来ないからな……………」

「そつか……………私の為にそこまでしてくれただよね……………」

イヴは胸の奥から込み上げて来るものを水で抑えるように飲み干すと同時に立ち上がった。

「シャドウ、今日はどうするの？」

「とりあえず次の街に行ってみようと思う」

二人共レストランを出て、ホルンカ村の門に移動した所でイヴが再び問いかける。

「次の街って何処に？」

シャドウは地図をウインドウで移しながら言う。

「ここだ。迷宮区に一番近い町。《トールバーナ》に行く」

迷宮区から一番近い街であり、第1層で一番大きい街でもある《トールバーナ》

迷宮区は塔の様に伸びており、ダンジョンの階数は20にも及ぶ。

そのため、ホルンカ村からでも迷宮区塔は見えたものの、近くで見るとでは迫力が桁違いだ。

ここまでモンスターを倒しながら進んだ俺達は多少のコレも溜めることが出来た。

そしてまず街に来てからすること。

それは、

「宿を確保することだ！」

「宿？」

「具体的には部屋だがな、この《トルバーナ》は大きい分宿も複数存在する。そのため、安い割にいい宿が存在する」

頷きながら俺の話を聞いているイヴを横目に歩きだす。

「まだSAOが始まってから2日しか立っていない。恐らく殆どのプレイヤーが《始まりの街》に居るだろうな。なので、今ならいい宿を簡単に借りなれるというわけだ」

「なるほど……じゃあお風呂もあるの!？」

いきなり顔を近づけてくるイヴに軽く仰け反る。

イヴは何時にもまして真剣そうな顔だ。

なぜ女性は風呂ごとときでこんなにも真剣になれるのか。

まあ日本人たるもの、風呂が好きなのはなんな珍しくは無いのだが、いくらこんな状況なのに……。

そんな事を頭の8割を使って考えながら、考えてあつた言葉を言う。

「ああ、そうだな。当然お風呂もついている」

「やったー!」

他愛のない会話をしながら、宿を一週間先取りで借りることに成功した俺達は一旦、部屋の中に入る。

借りた宿は二部屋お風呂付きさらにテラス付きで80コルという、中々良い宿を借りることができた。

ミルク飲み放題のサービスもある部屋もあったが、空腹感はしよとも喉が乾いたりしない仮想世界では、飲み物は味を楽しむ、気分的に飲むしか用途がないので、イヴも好きそうなテラス付きの方を優先させてもらった。

部屋に入ってみると、そこには床に敷かれた円形のカーペットにその上にテーブルにソファアが二つ。

奥の方に見える中に居る人をモザイクを掛ける仕様がついているのであろうガラスドアはお風呂の入り口だろう。

お風呂も見てみたが、入った途端部屋一面には白い四角のタイルが敷き詰められており、今まで木製の古い部屋っぽさはすっかりなくなっていた。

ざっと部屋をみた俺はソファアに腰を掛ける。

俺がここまで走ってきた1時間半の疲労を乗せてソファアに体がのめり込む。

息を吐きながら、休憩に浸っている眼の前のソファアにジャンプをして座り込む。

「……イヴ。テンションが上がるのはいいが、程々にな」

「分かってるよ」

実際に今は油断は出来ない状況だ。

「イヴ、一旦今の状況をまとめてみよう」

俺が真剣な顔で言った途端、イヴも顔を引き締める。

「今、《始まりの街》には囚われたSAOプレイヤー……まあ正式サービス開始から完売した一万本をかった人達が全てプレイしているなら、SAOのプレイヤーの数は一人になる。その一人の殆どが《始まりの街》いるわけだ」

「そして、俺たちに課せられたこのデスゲームから開放される条件はこのゲームの100層ボスを倒し、クリアすること。このまま第1層に現実も受け入れられないままうづくまっついても意味がない」

「まあ、時間がたてば、受け入れられる人が増えると思うが、人数はそんなに期待しないほうがいいだろうな。そして、その内迷宮区が攻略され、ボス部屋が見つかることだろう」

「それまでに俺たちがやるべきことはレベル上げ、迷宮区の攻略だ」

「レベル上げ……」

「まあ怖いかもしれないが、コレばかりは仕方がない。後は、まだ未熟のイヴにこのゲームの技を教えてやる」

「へえ、このゲームに技なんてあるの？ ソードスキルを打つだけでしょ？」

「それだけじゃ駄目なんだ。それはぼちぼち行くとして……こんな感じだろうな」

説明を終えた俺は上げていた背中に力を抜き、ソファーに背中を預ける。

——まあ、このまま元ベータスター達が攻略してその他は街から出ずにボスが倒せなくて終わるって可能性も無くは無いがな……。

そのことはイヴには言わないようにした。

第1層迷宮区 1階。

俺達は迷宮区攻略がてら、イヴの特訓、レベル上げに来ていた。

薄暗い迷宮区は隣にいるイヴの顔がギリギリ確認できる程度。

はぐれたらやばいなあと俺は思いながら、迷宮区の黒いであろう道をブーツの音を立てながら進む。

イヴも後ろで付いて来ては居るが歩幅が合っていないらしく、時々小走りになって歩いてくる。

俺も調整はしてやたいが、

「……大丈夫か？ もう少し遅く歩いたほうが良いか？」

「……大丈夫っ！」

この様にさつきから聞いても強がつて大丈夫と答えるばかり。

もう少し進めばモンスターがポップするはずなのでそこまでの辛抱だ。

するとイヴがいきなり速く歩いて俺を追い抜く。

金属が擦れる音を鳴らしながら歩く剣士の姿はとも体が細いイヴには似合わない。たとえ、それが防具を付けていて、腰に細剣を付けていようともだ。

・「ツールバーナ」に付いたことで、防具も一新した。

初期防具からレザーナイトと呼ばれる装備を一式に新調した。

女性のレザーナイト装備は革のステンカラーコートのような体を覆う革とスカートが繋がっていて、その上に鉄の胸当てが付いている。

足は同じく革に覆われていて、すね辺りを守る装備が付いている。

男性用は革のズボンに革のシャツに腰まで伸びた鉄装備がついているのだが、俺は俊敏性重視なので、胴体装備以外はレザーナイト装備にしている。

初期装備は胸当てがついているだけなのでこちらの方が動きやすいのだ。

歩くこと五分。

迷路の長い道を歩いた先には四角形の少し広い部屋。

相変わらず薄くらいものの、壁の周りについている青い松明が照らしてくれお陰で視覚はある程度確保できている。

その部屋に俺が一步足を踏み入れた途端、周りの松明が一回り大きくなり、部屋の中

心に3体の蜘蛛型モンスターが現れた。

「ひっ！ く、蜘蛛……？！」

「幾ら気持ち悪いからって気を抜くなよ。あつちは俺たちを殺す気なんだから……」

作戦はまず俺が前に出てスイッチをした後の空気にイヴがソードスキルを放ち練習する。

「まず俺が手本を見せてやる、イヴはスイッチを頼む！」

「了解！」

イヴは俺の前に出てパリの準備に入る。

その背中から徐々にこちらに近づいてくる蜘蛛型モンスターに拒否しているのが分かる。

今直ぐここから逃げ出したい気持ちだろうが、今はそんな優しくしてやる余裕など無い。

「来るぞッ！」

蜘蛛型モンスターが1メートル半程ジャンプしてイヴに飛びかかった。

イヴが蜘蛛型モンスターの腹辺りに鋭利な細剣の先端を滑らすように斬り上げた。

すると、普通のモンスターにダメージを与えた時の赤いダメージエフェクトとは違う、青いダメージエフェクトが散った。

パリー成功の証である。

パリーをされた蜘蛛型のモンスターが地面に叩きつけられて行動不能状態になる。

そこに俺は腰をある程度低くし、上半身を軽く落とし、腰の高さ辺りに剣を落とす。

すると、システムがモーションを認識して剣の刀身が薄緑色に発光し、システムアシストで前進するのと同時に床を蹴った。

そうすれば、通常より速い速度で移動が出来る。

片手剣用単発斬り、《スラント》だ。

そして、蜘蛛型モンスターに近づいて、剣を振り被ろうとする瞬間、腕に力を込め、剣を振る速度を上げる。

ソードスキルは蜘蛛の頭部分を直撃し、通常より強いダメージを与える。

しかも、その攻撃は音とダメージエフェクトから、クリティカルヒットだった事が分かる。

その攻撃は単発にも関わらず、蜘蛛型のモンスターの体力を一気に0にした。

途端、モンスターはガラスの破片となって消えていく。

「わかったか、この様にするんだ。まあ、事前に説明してあったからわかると思うけど」

「うん。一応……」

イヴが自身がなさそうに頷く。

俺はイヴの方に振り向くと、イヴの後ろに影が見え……。

「イヴ！ 危ない!!」

「えっ!?!」

後ろに飛びかかって来た蜘蛛に対処するべく、俺はイヴを抱えて飛び込んだ。
一応俺が下になり、床に激突する。

「くっ……一体倒すのに時間を使いすぎたか……」

「イヴ、今度は俺がパライするから準備しておけよ!」

「うん!」

蜘蛛が少し体を前だけ浮かせて毒攻撃の準備をした。

蜘蛛の攻撃方法は飛びかかりと毒煙を撒く攻撃しか無い。

二つしか無く、簡単なのでパライはしやすい方なのだ。

その毒けむり攻撃をしてくる前に俺は振り上げてパライをした。

その後、一旦後ろにバックステップした。

「スイツチツ!」

「ハアア!」

バックステップした俺の隣でイヴが走っていく。

細剣用基本突き、《リニア》だ。

速さからしてどうやら、スピードを上げるのは成功したようだ。あとは剣を振る時に力を入れるのに成功すれば……!

イヴが蜘蛛に向け、突きを入れようとした刹那。

刀身から青い光が消え、イヴが一時的に時が止まったように動きを止めた。

「――!」

失敗したのだ。恐らく、突く力を入れる所を間違えた。

この技は、成功した時、通常では出せない速さと威力を上乗せ出来るが、失敗する時のリスクも高く、失敗するとソードスキルが強制終了して硬直してしまうのだ。

「イヴ!!」

スタンから開放された蜘蛛はイヴに飛びかかっている。

俺はソードスキルを発動し、剣を振りかぶって蜘蛛を仕留める。

すると、横から入ってくる事を予想していた蜘蛛が飛びかかって来ていた。

「ハア!」

目標を横に移し、蜘蛛に剣を振り上げて真つ二つに切り裂く。

蜘蛛が四散したのを確認すると、イヴの方に振り向いた。

「大丈夫か!」

「う、うん。助けてくれてありがとう……」

「まあ、最初だからな。失敗しても仕方がない」

部屋の蜘蛛を倒し終わると大きくなっていた松明が元の大きさに小さくなり、視界が薄暗くなる。

俺達は次の獲物を探しに歩き始める。

再びモンスターがポップするまでの道中。

「イヴ、これからはビシバシ指導するからな」

「えー」

イヴが嫌そうに舌を出す。

「しょうがないだろ、生死に関わることなんだからな。失敗したら助けるが、イヴに強く

なって貰うには、俺も心を鬼にしなくちゃならない」

「分かってるよ……」

そして、俺達の特訓は続く。

「イヴ！ さっきのは早すぎだ！ 感覚を掴むんだ！」

「遅すぎだ！ 剣を突き出すのと同じタイミングと言っただろう！」

などと、声を張り上げながら、戦闘は続いた。

……一つイヴに勘違いしないで欲しいのは、俺はワザと厳しく指導しているだけだ
と。

嫌われないか内心心配しながら声を張り上げる。

「はあ……はあ……」

「へばつてるな！ 次の敵がすぐ来るぞ！」

「……了解っ！」

イヴは精神的な疲労が続いていた。

肉体的疲労はここでは感じないはずなのに、息が荒くなる。

確かにシャドウの特訓はキツイ。

現実の自分の体でもう既に倒れ込んでいるだろう。

だが、イヴは体に鞭を打って体を動かした。

コレも、シャドウが私の為にしてくれていんだと思えば、キツイ特訓を厳しい言葉も

耐えることができた。

特訓を初めて30分後、ダンジョンの階層は2階に上がり、この階層からは蜘蛛型モンスターから牛人型モンスターに変わる。

俺がパリイした斧に仰け反ったイヴが《リニア》を放つ。

そして、今度は硬直すること無く、突きを腹に食らわせられた。

「ぶもおおおおお!!」

声を上げながら牛人型モンスターはガラスとなつて四散していく。

「……でき……た……?」

イヴはそう思い、シャドウに振り向く。

やっと出来たよと。素直に褒めてほしいと。

だが、

「一回成功しただけだ。まぐれかもしれん。せめて3回連続は成功出来るようになってからだ!」

シャドウは自分の思つては居ない言葉を言わざる負えなかつた。

イヴにこの技をマスターして貰いたいがために。

今日はイヴが疲れたと言うので、一旦宿に戻つた。

「……………」

特訓を初めて3日目。

階層は既に4階まで上がり、レベルも徐々に上がってきた。

2回連続はあるものの、3回連続は出来ずに居た。

そして、変わらず牛人型モンスターに当てて2連続は成功した。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「イヴ！ まだ来るぞ！」

「……………もう……………」

無理……………という言葉は私は無理やり押し込めた。

弱音を吐いている余裕なんかない。

自分も誓ったじゃないか。

ネペントの時の様に怯えながらシャドウを待つのは嫌だと。

嫌なら、自分が強くなるしかない。強くなるにはコレを覚えなくてはならない。

どうやらシャドウも多少息を荒げている。シャドウが疲れているのに自分だけ音を上げる訳には……………いかない！

「ヤアアアア!!」

私はそう思い、限界の体に最後の鞭を打って、パリイしたモンスターに全身全霊をかけてソードスキルを発動した。

そして、硬直すること無く、モンスターのクリティカルヒットをして一撃で仕留めた。

モンスター全員が倒され、広い部屋のシャンデリアの炎が元の大きさに戻った。

「やつ……………た……………」

ついに成功した。

三連続、成功した。

これでマスター出来たはずだ。

私は達成感よりも、脱力感が勝ち、その場にへたり込んだ。

そして、私の前に歩いてきたシャドウの人影を見つける。

……コレで褒めてもらえるかな……？

そう思い、顔をあげると、いきなりシャドウが私に抱きついてきた。

一瞬動揺しそうになったが、直ぐに力を抜いてシャドウに体を預けた。

暖かい。

素直にそう思った。シャドウの体温が私の疲労仕切った体に染み込んでくる。

瞬間、胸の奥から何かがピリツとするのを感じた。

「…………ごめん、イヴ。特訓とはいえ、思ってもいない事を言ってしまった……辛かっただ
ろうに…………」

「もう…………そんなに強く抱きしめたら痛いよ…………」

当然、仮想世界では痛みなど感じないはずなのだが。

……なのだが、今は痛かった。体がじやない、どこかが……？

いつもこうだ。

シャドウに積極的に来られると、なにか、胸の奥に小さい電気みたいなのが走って痛くなる。

なんなのだろう、これは……？

「私……やったよ……シヤドウがいったとおり、3連続成功したよ……」

「ああ……お前はよく頑張った……」

そうシヤドウが入った途端、私は心が満たされた感じがした。

3日間、宿では普通に生活していたものの、シヤドウに褒められる事など一度も無かった。

—— やった……やつと……褒められ……た……。

途端、私は繋いでいた意識がついに途切れた。

第10話【茶色と青の少女】

デスゲームとなったSAOでは《圏外》に出ることすら危険が伴う。

なのに迷宮区に入ったら最後、死を覚悟する程度の決意はしておいたほうが良い。

迷宮区のモンスターはフィールドのモンスターよりもレベルが高いし、強さや大きさも変わってくるので、最低でも4人パーティーで入るのは当たり前となるだろう。

だが、現在第1層では違う、迷宮区に入る無謀とも言える行動に出る人が少ないからだ。

そんな迷宮区でも安全地帯が存在する。

俺はちようどイヴを抱えながらその安全地帯の目の前に来ていた。

薄暗い迷宮区でも強調されているような赤色をしている両開きの扉だ。

俺はもう一度おんぶしているイヴを上に向けてお尻部分を左手で支えながら開いた右手で重そうな岩扉を開けた。

いかにもホラーゲームの軋んだ木のドアよりも低いトーンで再生された開き音と共にゆっくりと扉が開いていき、俺が入れる程度に開くと素早く中に入って扉を閉める。

やっと安全エリアに入った事で安堵の息を吐くと、床にイヴを仰向けに寝かせる。

岩か鉄かわからないが、その地面に直接寝ているのだから寝心地は相当悪いだろう。俺でもこんな所で熟睡など不可能だ。しかも、外から中が静かなだけにモンスターの徘徊している足音や鳴き声が聞こえるのだ。

まともに寝れる人など居ないだろう。

直ぐに起きるだろうと思つてイヴの頭を軽くさすりながら目を多少隠していた前髪を横に流す。

それと同時にイヴの両目がゆつくり開かれた。

最近同じような展開でビンタを食らいそうになつたので、今回も何処から来ても良いように右手を構えていると、今度は直ぐにビンタが飛んでくることはなかった。

しかも開かれたイヴの両目は半分くらいだった。

目を漫画で表現するならば必ずとろくんといい表現をするだろう目でイヴは小さく呟いた。

「……………夢？」

「……………夢じゃないぞ、起きろ」

そう言いながら軽くペチツとイヴの頬を叩くと、今度はちゃんと両目が開かれて、そのまま起き上がる。

「あれ、()は何処なの？」

「ここは迷宮区の安全エリアだ。イヴがいきなり気を失ったから抱えてここまで連れてきた」

「抱えっ!? ……ん、うん。ありがとっ……………そっか私あのまま疲れて段々意識が薄れてそのまま気を失っちゃったんだね」

何故か、一瞬だけ動揺の表情に変わったが、特に気にせず話を続けた。

「ああ、流石にこの手のゲームを初めて数週間も経っていないイヴをアレだけ特訓させたんだ。無理もない……………」

「別にシャドウのせいじゃないよ、お陰で私は強くなれたし……………」

するとイヴが突然顔を俺の顔にわずか10センチくらいの距離まで近づけてきた。

「これで今度はシャドウと一緒に戦えるよ!」

嬉しそうにはにかんだ。

俺はそんなイヴに思わず笑みを浮かべながら言った。

「確かにイヴは前とは比べ物にならない程に強くなつたはずだ。これなら順調にレベル上げが進めばフロアボス攻略にも一緒に行けるかもな」

「フロアボス……………」

「ああ、いつになるか分からないが、その内この迷宮区20階層も攻略されるだろう」

「その時まで、レベル上げ頑張らないと……………」

イヴはシャドウには見えない腰の後ろで右拳を握る。

—— やっと、やっとシャドウと一緒に戦える、もうあんな寂しい気持ちにならなくて良いんだ。私って元々そんなに寂しがり屋じゃないと思ってたんだけど……もしかしてシャドウが来てから甘えてるのかな。気をつけないと、最近多分この私の何処かにある寂しい気持ちで急に胸が苦しくなったりしてるんだ、そうに違いない。

イヴが妙に顔を俯かせているから、俺はその間に見てくれは凄く重そうな岩扉を片手で開ける。

現実でこんな俺の身長以上の扉を開こうとしたら両手で思い切り押ししても少し動く程度だろう。

「イヴ、今日は一旦帰ろう。疲れたろ？」

俺が一度顔を外に出して近くにモンスターが居ないか確認した後、振り向いてイヴに言う。

するとイヴはいつの間にも立ち上がったのか、そこにはいつもの眩しい笑顔を浮かべていた。

「うん！」

それから二ヶ月後、ひたすらにレベル上げと迷宮区の攻略を繰り返した後のある日。俺は早朝から《ツールバーナ》の商店で消耗品のポーションなどを買っていた。

まだ早朝だからか、人はNPC以外にいない。

こんな時間帯にいる人は昨日の夜からぶっ通しで迷宮区にこもっている人くらいだろう。

まあ、そんな何日もあんな所にこもるなど精神的にも疲労が必ず出るし、疲労が積み重なると大きなミスを引き起こしかねない。

そんな自殺行為にも等しい事をする人など居るはずもなからう。

だから、俺とイヴも一日迷宮区に潜るのは二時間程度、長い日で半日居ることもあるが、その時はこまめな休憩を挟んで居る。

βテストの時に速さ重視で攻略していた時とは違って、今はイヴがいるのだ。少ない危険も排除して何事も安全第一で無ければならない。

そんな事を考えながら消耗品を買い終わった俺は次の目的地向かう。

まあ、目的地と言ってもすぐ隣なのだが。

直ぐ隣は雑貨屋だ。雑貨屋は消耗品以外の色々な物が売られているいわゆる何でも

屋だ。

もつと上の階層に行けば掘り出し物やマジックアイテムなどが売られている事もあるので、ベータテスターは上の階層でこの雑貨屋に通う人も多いだろう。

そんな何でも屋だが、第1層《ツールバーナ》ではそうではない。

この第1層に限り、普段はランダムな品物も決まっている。

そして俺の目当てはこの雑貨屋で売っている寝袋だ。

寝袋と言っても現実にあるようなコンパクトで寝心地がベットと同等にもなっているものとは違って、まるでただ単に体を暖かくしながら寝るだけの機能くらいしかない。

携帯電源でクーラーや暖房が効いてどの時期でも心地よく寝れたり、バックに入るくらいまでコンパクトになる機能は備えてないのだ。

数年前はそれが普通だったらしいのだが、今の高性能寝袋に慣れている人達にとつては考えられない話だろう。

まあ、俺は昔に一度だけ寝たくらいしか無いが。

俺はシートを広げてその上に色々な品が置いてある中から見ると寝袋のアイテムをタッチする。

するとぼん、という音と共に購入メニューが表示される。

値段は5000コル、まあまあな値段だが今まで迷宮区の攻略やクエストをやってきた俺はこの位の出費はどういうことはない。

下の欄の右矢印を押すと左右の矢印の間の数字が1から2に変わる。

そして下の購入ボタンを押すと、瞬時に寝袋がアイテムストレージにしまわれた。

コンパクト機能もない寝袋だが、幸いSAOでは制限はあるが、某猫型ロボットのポケットのような機能があるので、幾ら大きかろうと気にすることはしない。

買い物を済ませた俺はイヴが居るアクセサリー店に直行。

別に急いでるわけでもないのに、早歩き程度で向かうと直ぐに腰を落としながら何かを見つめているイヴを見つける。

距離があるので、画質の荒さが目立って表情は見えないがどうやらペンダントを見つめているようだ。

イヴに近づくと、足音をしているのにも関わらず、未だにペンダントを見るのに真剣なイヴにそつと肩に手をおいた。

「わひゃあつ!?!」

いきなり上擦った声を上げて素早くこちらに振り向いて立ち上がったイヴはまたもや少し上擦った声で話し始めた。

「ど、どうしたの、シャドウ」

「いや、俺が近づいても気づかないくらいに真剣に見てるもんだからさ、買うんだったら買っついでいいぞ。しかし、一体何を見てたんだ？」

俺がイヴの横に顔を出そうとした時、俺の視界を革装備が覆う。

そして、何かを言う暇もなく振り向かされてイヴに背中を押されながら歩いた。

段々店に遠くなりながら俺はイヴに驚いた声で聞いた。

「お、おいイヴ。なんでいきなり背中を押してくるんだ!?! 買わなくて良いのか?」

「買わなくていいから! 速く行こ!」

俺はイヴに背中を押されながら歩いた。

イヴは頬を桃色に染めながらアクセサリー店に振り向いた。

イヴが見ていた所にはハートを垂直に割ったペンダントが二つあった。

赤と青に色が分けられていて、丁度大きさも二つのペンダントを合わせたら半分赤、半分青の一つのハートが出来るようになってる。

自分がシャドウに声を掛けられるまで考えていた事を思い出すと、更に顔が赤くなるのを感じて直ぐに視界からアクセサリー店が無くなるよう振り向いてシャドウの横に並んだ。

寝袋を買ったのは、なにも迷宮区で何日もこもるために買っではない。

迷宮区の攻略を初めて二ヶ月、攻略に参加している人は数えられるくらいしかないが、順調に進んで今は迷宮区階層15まで来ている。

もう少しでボス部屋が発見されるだろうが、レベル上げをし続けたお陰で第1層のモンスターではもうレベルがとも上がられない程になっていた。

ちなみに俺とイヴも現在レベルは13である。

だが、流石にイヴが攻略にも疲れてきたのでたまには何処か違う所に行きたいと言うので、今日は俺がβテスト時に行った第1層の西側にある山脈の頂上までピクニック感覚で行こうとなった。

もうフィールドのモンスターで苦戦する奴はいないので、安心して出かけられる。

《トールバーナ》から出てから走ることで1時間、目的の山脈近くまで来たのだが、俺は奥に人影が実体化していくのを見つけて足を止めた。

それに続いてイヴも足を止める。

「どうしたの?」

俺の顔を後ろから覗き込んでそう言ったイヴを一瞥した後再び奥の風景に目を懲

らしめた。

奥の方には先程俺の視野範囲に入った人がなにやら激しく動いている。

表情どころか服装も何だか見えないくらいに遠いが、その動き方から恐らくモンスターの戦闘中だと分かった。

それを確認するやいなや俺はイヴに言いながら地を蹴った。

「イヴ、あれは恐らく戦闘中だ。危険かもしれん、助けに行くぞー！」

「う、うん！」

イヴからじゃギリギリ視野範囲に届いて無くて人影が見えてないのか、少し不思議に思いながら俺に着いて来た。

システムの上限ギリギリのスピードで奥の人影に疾走していく。

耳に風が靡なびく音が聞こえ、草原を二つの影を残しながら疾走した。

数十秒ほどで表情や格好が確認できる程の郷里に来た時には見えていた人影が一つじゃなく二つの事に気づいた。

二人共このゲームでは少ない女性プレイヤーだ。

革の装備に胸当てが付いている程度の軽装備から《始まりの街》から出てきた初心者だと分かる。

青髪のリボンヘアが特徴的な少女と茶髪で肩より少し下くらいに伸ばした髪にアホ毛

が立っているのが特徴的な少女だった。

どちらの表情も俺が現在で何度も見てきた恐怖の表情になっている。

相手しているのはフレンジーボア3体、2対3という一件不利な状況だが、フレンジーボアは他のRPGで言うスライムなどに入る雑魚なのだ。

いくら初心者だとしても、余程なミスと棒立ちになつてさえないなければ負ける——死ぬ事はないはずなのだが、二ヶ月前に始まったデスゲームのせいで死に対する恐怖で足が竦んで動けなくなったり、思うように動けなかつたりするので。

なので、フィールドに出た時の死亡数が急激に上がっているのは明確だ。

二人の少女が苦戦しながらも3体フレンジーボアの突進攻撃を身を投げ出して避けたり、剣の腹で防御している。

怖いからなのか、攻撃には移せないようだ。

二人で声を掛け合いながら上手く連携しているようだが、動きが硬すぎて直ぐに3体に追い込まれる。

そう思ったのも束の間、青髪の少女が剣で突進を防御した数メートル先で茶髪の少女が横に身を投げだして回避した刹那。

どんな悪運が重なったのか、青の少女が防御のせいで動けないからなのか、茶髪の少女が回避した事で動けない青髪の少女にフレンジーボアが突進し続けていた。

「……しまっ!？」

茶髪の少女が叫ぶが、声だけでどうなる程甘くはない。

ついに青髪の少女とフレンジーボアが衝突した。

数回転がりながら数メートル飛ばされた少女の体力が少し減少する。

たかが一回食らって程度。

今までのゲームだったら、そう思えただろうが、ゲームの中の死≡現在の死になっていくこのゲームでは一回食らったくらいでその恐怖で全身が包まれる。

衝撃でよろけながら体を起こした青髪の少女だったが、奥で自分に向かって今まさに突撃しようとしているのを見ると顔を青ざめて足で地面を削りながら後ろにズリズリと下がりながら掠れた声を漏らす。

「……いや……いやっ……いや……」

頭を左右に振りながら掠れた声で漏らしている間にフレンジーボアは突進を開始する。

「いやーッ!!」

強く瞼を閉じて叫んだ少女の前に割り込んだ俺は突進してくるフレンジーボアを蒼

白の軌跡を残しながら垂直に斬りつけた。

直後、心地良い手応えとダメージジェフェクトが四散して、フレンジーボアはその体をガラスの破片に変えて消滅した。

俺は一息吐いた後、奥に居るイヴに話しかける。

「イヴ、そっちは大丈夫かー?」

奥でイヴが恐らく自分のせいで青髪の少女を殺してしまいそうになるのを見て頭を抱えている茶髪の少女を慰めながら右手でグットを作るのを確認すると、俺も後ろの少女を確認しようとして振り向いた時。

後ろにフレンジーボアが突進して来ているのが見えた。俺は今まで来にしていなかった3体目の存在を忘れていた。

俺が顔を引き締めると同時に青髪の少女が振り向いてフレンジーボアを確認した。

「きゃっ!?!」

俺はまた声を上げる前に少女の左肩に左手で掴んで少女を俺の後ろに回した。

そして片手剣専用斜め斬り、《スラント》の構えを取る。

刹那、俺が今まで強化し続けたアニールブレイド+4の刀身がミスグリーンに発光してシステムアシストで腕が勝手に動くのに自分で力を入れてスピードとパワーを上乗せした。

「セアッー！」

突進してきたフレンジーボアに丁度振り下げた剣が当たってフレンジーボアの頭に斜めの切り口が出来た。

直後にフレンジーボアは破片へと変わった。

無事に倒せた俺は一旦姿勢を直立した後、右手の剣を背中中の鞘にしまう。

そして、後ろに振り向くとそこには地面にぺたりと座り込んで俯いている少女がいた。

とりあえず、大丈夫か？ と声を掛けようとした瞬間、少女の俯いている地面に一粒の涙が落ちた。

続けてもう一粒、もう一粒と地面に落ちていく。

俺は現実で人見知りでは無かったが、人と余り接して来なかった俺は目の前の少女が泣いている光景にどう対処すればいいか分からずに啞然とするしか無かった。

——こんな時、どうすればいい……そうだ、イヴだったら俺はどうする？ 目の前に居る少女がイヴだったら……俺がする行動は一つ。

俺は地面に膝を付いて俯きながら涙を流している少女の体を起こす。

それで少女の顔が俺の前に現れた。

整っている顔の輪郭に髪と同じく、髪よりも薄く薄い青い瞳。

俺は少女の瞳を覗き込むように見ながら優しく微笑んだ後、背中に手を回して優しく少女の体を包んだ。

二ヶ月程前にこんな光景を見たような気がするが、当然だ。

俺は今、目の間に居る少女をイヴだと思つてこの前の行動をインプットしているのだから。

俺の前でイヴと茶髪の少女が顔を真っ赤にしているが、イヴだと思つてインプットに集中している俺はそんな二人を気にしている暇など無い。

俺に抱かれたので必然的に俺の右肩に頭を乗せた少女は余計に涙が溢れた。

そのまま励みの言葉を求めるかのように恐怖で掠れた、涙で震えた声で呟いた。

「……怖かった……私、もうここで死んじゃうと思つたから……うっ……」

俺は目を細めながら少女の背中を優しく擦りながら呟く。

「大丈夫……安心しろ……」

それから数分の間、俺は優しく呟いた。

「落ち着いたか……?」

「……………」

俺は少女の肩を両手で掴んで話しながら言った。

だが、少女は頬を朱色に染めながら目を泳がしているためか聞こえないらしい。

「……………おい?」

「ふえっ!? あつ、え、ええ。大丈夫……………」

俺が声を掛けた途端、更に顔を赤くしてたどたどしく返事をした少女を見て、俺は自分がしてしまった事を悟った。

——しまった。何かしてあげる事を考えていただけだから相手の気持ちなど考えてなかった。

俺はそう思うと急に気まずくなり、直ぐに立ち上がった後、振り向いて喋る。

「じゃ、フィールドに出る時は気をつけるよ。行くぞ、イヴ」

そう言い残して俺は少し駆け足でその場を去った。

その場には青髪の少女と茶髪の少女が残った。

茶髪の少女が、隣に居る青髪の少女に向きながら言う。

「えー、とりあえずあの人も言ってくれたし今日は帰る？」

「……………うん」

また俯いて返事をした青髪の少女を見た茶髪の少女は悪戯っぽく笑いながら右手を口辺りに添えながら、

「あら、もしかして妄想世界の方でいい男見つけちゃった？」

それを聞いた青髪の少女は髪の色に合わない程に顔を真っ赤なる。

「ばっ!?　ち、違うわよ!　それに、あの人にはもう女の子が付いていたし……………」

「じゃ一応視野には入れてたんだ？」

「な、なわけ無いでしょ!　さ、さっさと帰るわよ!」

青髪の少女がそそくさと《始まりの街》に戻ろうと一歩踏み出した時、茶髪の少女が呟いた。

「……………そういえば、助けてくれたのに名前もお礼も言えてなかった……………」

「あ、たしかに」

その言葉に青髪の少女が再び振り向いて言った。

茶髪の少女は微笑みながら、

「お礼の為にまた会えると良いね」

「……………うん」

「あ、そこはうんって言うんだ？」

「ち、ちっがうわよ！ お礼のためよ、お礼のため!!」

どこまでも続くような広い草原で少女の怒鳴り声が響いた。

第11話【翠の翼竜】

危険になった少女二人を助けた後、再び西の山脈まで歩いていった。

目の前には仮想世界とは思えない立派な山と大草原が背景になっていてその光景自体が一つの芸術作品のようだ。

まあ、その大草原に狼型や猪型のモンスターがいなければの話だが。

直ぐ近くに山脈に着くため、このまま歩いていけば5分といった所だろう。

山脈と言っても現実世界にあるような物凄くデカイ山脈とは少し違う。

マップには山脈と付いているがどちらかと言うと小さい山を隣同士でくつつけたような形をしていて、それほどデカイものではない。

次の第2層行けばコレ以上に大きい山など沢山あるのだが、この第1層は層によって決まっているテーマが決まっていなく、森、草原、山などが小規模な物もあるが、全て揃っている。

話を戻すと、目の前にある山脈はβテストの時は訪れる人は殆どいなかった。

何故か？ 理由は単純この山には特にクエストがないのだ。

少なくとも攻略攻略で頭がいっぱいだった人が多かつたであろうβテストの時には

好んでこの山に来たがる人はいなかった。

一つ訪れる要素があるとすればこの山の天辺付近に平らな部分あって、そこには小さいが洞窟もある。

そこから見える第1層の景色は正しく絶景と言えるだろう。

だから、今回は行く場所をこの山にしたのだ。

ざっと経緯を説明して来たが、その山に行く途中ちよつとした事件が発生した。

《始まりの街》から出てきた初心者がフィールドで狩りをしていたのだ。

初心者二人にフレンジーボア3体、雑魚モンスターのフレンジーボアが一体増えた所で倒す分には何ら支障はないのだが、今の状況はこの世界の脆い^{もろ}体力が0なったら現実世界の自分も死ぬ。

こんな状況でしかも初心者が冷静に戦えるわけがなく、危ない所を俺とイヴが助け出したというわけだ。

そう、この世界の体力——命は脆い。

こういうMMORPGはレベルによって強さも大きく変わる。

レベルが低いとその分ステータスが低くなって危険度も増す。

なので、今この第1層の特に初心者はレベルがまだそんなに高くない人が多いはずだ。

つまり、この第一層の時期が一番死亡数が高いと俺は踏んでいる。

その分レベルが上がればレベルが自分より低いモンスターに大きく有利が取れるという利点があるが、そこまでなるまでがまず難しい。

そして今、無事に人助け的な事もしたし、まあ数分前の自分の行動に少し後悔はしているが、少し気分が良くなっている反面。

普段は歩幅が違っていていつも俺よりも後ろか隣で付いてきているイヴが今は俺の前をずかずかと歩いていった。

しかも少し早歩だ。

それは俺が必然的に身につけてしまった相手の瞳を除いて感情を予想するという特
に居ることもない特技を使わなくとも、歩いている後ろ姿を見ているだけでも分かる。

——あー、何か機嫌悪いな。

一生懸命自分の記憶を探って何かイヴにしまったかを数秒たつぷり使って考
える。

——心当たり、か。：特に無い、はずだよな……。

決して自分の記憶力を疑っている訳ではない。

記憶力に関して自身があるくらいだ。

どの位かというと、《トールバーナ》で見た人達の顔を全員覚えておくくらいには良いはずだ。

しかし、何かイヴの機嫌を悪くしてしまった理由は分からない。

これは聞いてみるしか無いか。

俺は意を決してイヴに話しかけた。

「えーと、イヴ？ 何か機嫌悪いけど、どうした？」

「……特に…何も、無いけど……」

段々イヴの声が小さくなっていつて、いきなり言葉が途切れた。

そしていきなりイヴが立ち止まって俯きながら少しの静寂が流れる。

すると今度は浅く息を吸い込んで確かに聞こえる声で話し始めた。

「けど…けどっ……あの青髪の子……抱きしめてた」

「——ッ」

痛いところを突かれた。

この所ポーカーフェイスを貫いてきた俺だったが、流石に今のは少し顔を引きつらせてしまった。

そんなことよりも、速く弁解する為に頭の中で必死に言葉を探す。

「あれは、えっと、いきなり泣いた女の子の対応なんて知らないから、何とかしようとい

ヴにするみたい思っただけであってだな……」

さっきの俺がそういう趣味の気持ち悪い兄、とか思われたら嫌すぎる。

弁解を試してみたものの、イヴは俺に顔が見えないようにそっぽ向いてしまった。

「お、おい！ はあ………何ていうかまあ、抱きしめたのは焦っていた失敗だと認めよう。だが、あくまで俺はイヴにするみたいに思っただけであってな………流石にあそこまでの反省しているが、別に安心させる為にはアレが最善だと思ったんだ。俺も一回イヴにその事を教わっている。それなのになんでイヴが怒る必要があるんだ？」

とりあえず今思っている事を全部ぶちまけてみたが、どうせまた怒られる覚悟で言ったので、また怒鳴り声が飛んでくると思っていたのだが。イヴの反応は俺が思っている予想を大きく覆すものだった。

「えっ!? あ………えっ………やっぱり………変、だよね………」

イヴは自分でも顔が赤くなっているのが分かった。

そしておおきく深呼吸、唾を飲み込んで何事も無かったかのように俺の方に首だけ振り向いた。

「もう許してあげるから。速く行こっ！」

イヴはそう言いながらいつも通りに可愛らしい笑顔を見せた。

俺はイヴが振り返る寸前、瞳の中を目を細めて凝視する。

——ん？ 少し焦点がズレているような……………？

だがそれ以上は何も分からず、振り返ったイヴは再び目的の山脈の方向に歩いていてしまう。

初めて見る感じだった。

特に怒っている時に怒る現象は確認できなかったし、焦点がズレている以外特に変な所もなさそうだった。

俺はそれ以上深くは考えず、とにかく許してくれたことに感謝しようと思われ、先を歩いているイヴに追いつこうと走り出した。

西の山脈 頂上付近。

「んしょっ！ つつっ」

イヴは踏ん張る声を出しながら最後の岩石の自分の身長の高さの腰辺りまである段差を片

足で登りきった。

これもゲームのステータスの影響なのかなあ、と思いながら俺も同じように最後の段差を登る。

登った先には半径20メートル程度の円形のスペース。

奥は白い霧が重なってよく見えないが、それもそのはず、ここはあくまで頂上付近。

ここは一番雲が濃い場所なのでその影響でよく見えないのだ。

「えー、何かここまで頑張ってきたのになんも見えない」

俺の前で辺りを見渡していたイヴが唇を尖らせながら言った。

まあ分かる。ここまで登ってきて達成感がほしいのだろう。だが、その達成感を得られるのもう少し先だ。

「ここはまで頂上じゃないからな。後はこの辺りにある洞窟を探してそこを抜ければ頂上だ。ここは雲が集中する場所だから辺りが余り見えないけど、頂上にいけば丁度雲の上に行けるからな、下の光景も見やすいだろう」

「えー!? あともう一回登るの、もう疲れたよー」

俺はため息を吐きながらだるそうに座り込んでしまったイヴの頭を軽くチョップをかました。

「仮想世界に肉体的疲労はないだろ、後もう少しだから頑張れよ」

「はい。あつだつたらシャドウがおんぶして連れてつ……………て……………」

イヴは気軽に口にした発言が余りにも恥ずかしい事を悟った時、激しく後悔したが、少し遅かった。

俺はそんな事を思っているイヴを知る由もなく言ってしまった。

「イヴがしたいなら別にしてもいいけど？」

「えっ!? あ、あの……………大丈夫……………です……………」

「そうか、なら速く行くぞ」

「……………はい」

イヴは顔を赤く染めながらシャドウの後をついて行った。

頂上付近は霧が多いため、視界が見える範囲で洞窟を探さなくてはならない。

なので、探すのに求められるのは本来は自分の足で端から端まで歩いて探すのが良いだろう。

だが、ベータテスターの俺は当然洞窟の場所も覚えているため、難なく探し当てることが出来た。

俺が洞窟の方向に歩きながら目を凝らしていると、突然霧の奥に薄つすらと人影が見えた。

それを見た途端足を止める。

当然いきなり止まったため、後ろに付いてきていたイヴが俺とぶつかった。

「わっ!!? ちよつとシャドウなんで止まって——」

「しっ!」

俺はイヴの言葉を人差し指を唇に軽く当てながら小さく言い放つ。

その行動でイヴが真剣な表情に変わり、音量を小さくして俺に話しかけてくる。

「……………どうしたの?」

「奥の方に人影が見える。ゆっくり近づいてみよう」

俺はなるべく足音を消しながら霧の中の人影に近づいていく。

すると、段々人影がくつきりしたものになってきて、人影の頭の上に何か浮いている

物が——

「……………ぷっ」

俺は、人影の正体がわかった瞬間、おかしくて思わず吹いてしまった。

「はあ、俺達は一体何をしてんるんだ……………」

「ちよつ、なに立ち上がってるの!? 危険なんじゃ…………」

俺が、呆れながらも立ち上がると、イヴが慌てて止めてきたのを、スルーし、人影に

近づく。

イヴも不思議に思いながら、立ち上がり、俺についてくる。

そして、イヴも近づくと、人影の正体がわかったらしく、走り出した。

俺は隣で走りながら横切っていくイヴを見つめながら言う。

「全く、どうしてこんな所にNPCが居るのか分かんが、βテストの時はこんな所にNPCなんかいなかったんだがな」

話していると、正体のNPCに迫いついて、対峙する。

NPCは後ろで束ねた青髪に渋い色合いの特徴的な服を着ている少女だった。

どこかの民族衣装を参考にしたのであるだろうか？

とりあえず、何か話しかけてみようかと、俺は口を開く。

「えっと、どうしたんだ。こんな霧だらけの所で」

すると、NPCは静かに口を開いた。

「私は、この山の妖精、マウと申します。実は、あなた達に頼みたいことがあるんですが……」

「ああ、なんでも言ってみろ」

「実は、私は一人前の妖精では無いのです。一人前の妖精になるには、この山の山頂にいる、翠色のドラゴンを倒さねばなりません。……ですが、何らかの理由でドラゴンが暴走してしまったのです。とても私では手におえません。助けてくれますか？」

俺は口元を緩めながら頷く。

「ああ、もちろんだ」

「ありがとうございます」

すると、ピコンツという音と共に、目の前にホロウウィンドウが現れる。

クエスト内容と、下にNOとYESの選択肢があり、クエスト内容は――

――翠のドラゴンの討伐、そのまんまだな。ん？ 二人限定クエスト……？

俺はイヴも一緒に条件は満たしているの、特に気にする事もなく、OKを押す。

すると、マウの頭上にある「？」マークが「！」マークに変わり、クエストが開始された。

「じゃ、行くか」

「うん……でも、ドラゴンって大丈夫？ 危険じゃない？」

「大丈夫だろ、レベルも迷宮区のモンスターより高くなってるんだしな。だが、危険になつたら逃げろよ？」

そんな話をしながら、俺達は山頂へと上がっていった。

山頂は、霧がすっかり晴れて、円形の土地だった。

奥には大きな空洞がポツカリと空いていて、そこからジロリと二つの閃光が光り――

「――ッ！ 不味い、避ける、イヴ!!」

瞬間、空洞の中から輝かしい物体が高速で近づいてきて、俺とイヴは左右に別れるようにして、それを避けた。

横から聞こえる風を斬る音と風圧に、背筋が冷たくなる。

「あれが……翠のドラゴンか……」

突進を避けられて空を貫いたドラゴンが、姿を現す。説明通りの鮮やかな翠の鱗うろこに金属っぽい角ばった翼、そして鷹の様に鋭い目に鋭利なクチバシがある。

ドラゴンにも見えて、鳥にも見える。言うならば、正しく翼竜よくりゆうだ。

翼竜が曲線を描きながら天に登り、シャドウ達に見せつけるように翼を広げた。

鮮やかな翠の鱗が、夕焼に照らされて紅がかかり、神々しく翼竜が輝く。

「ゴあああああああしやあああああーッ!!」

竜の鳴き声の後に、鳥の鳴き声が続く、声音だけで痺れてしまうようになる。

シャドウの隣にイヴが並び、天に佇んでいる翼竜に対峙する。

すると、いきなり翼竜が更に体を反らせた刹那――

一瞬。されど一瞬、たかが一瞬。だが、その一瞬で翼竜は高速で急降下し、俺達に突

進してきた。

その一瞬で俺が出来た事は、イヴを突き飛ばしたぐらいだ。

瞬間、目にも留まらぬ速さで翼竜はシャドウを通過した。

「えっ……………あつ……………」

いつの間にか、腹に横線のダメージエフェクトが散って、体力が一気にイエローまで無くなる。

ガクンと体から力が抜け、地面に膝を付く。

「シャドウツ!!」

シャドウに突き飛ばされて回避できたイヴが慌ててシャドウに近づく。

そして、肩を貸しながら何とか立たせた。

「…………イヴ、俺はしばらく動けそうに…………ない。速く…………逃げる…………ツ！」

「何いってんのツ!! そんな事出来るわけ…………ツ!!」

「はあ、はあ、なに言ってる。来る前に約束しただろうが…………ツ！」

——思ったより傷が深いな…………ははっ、割と不味いかもな…………

これが現実ならば今頃、とんでもない血がでている事だろうが、ここは幸い仮想世界。だが、傷を負った時に感じる重さ、痺れは現実とは変わらない。痛みがない分、重みと痺れが重くのしかかり、体の自由を制限する。

イヴは息を飲む。

そして、背後の空洞の壁にクチバシが突き刺さって、抜けなくなっている翼竜を睨みながら、近づき、佇んで腰の細剣を引き抜く。

ジャキツと金属が擦れる音がなり、空を斬りながら先端を鳥竜に捉える。

「イヴ……なにを……!?!」

「いいから、速く回復して! ここは私が何とかするから、速く!」

——私は今までレベル上げをしながら戦闘の特訓を重ねてきた、ここで、やらなきゃ、一体何の為に特訓したの!!

イヴが自分自身にそう言い聞かせる、が。

——なんで……なんで、こうゆう肝心な時に足が竦むのツ!! なんで、足が震えるの………

体は正直で、シャドウを一気に戦闘不能にまで落とした怪物の恐怖に過剰に反応していた。

「……イヴ………」

シャドウが、重い腕でウィンドウを操作し、何とか回復ポーションの所までたどり着き、それを実体化させる。

遠くでは、翼竜が刺さっていたクチバシを抜き、再び天高く舞い上がる。

そして、翼竜の目がギラリと閃光を放った刹那、イヴを標的に急降下して突進してきた。

「——ッ」

喉を鳴らしながら右にステップし、突進をギリギリで避ける。

チツとイヴの鮮やかな朱色の髪が翼に当たり、風圧と風を切る音が隣から聞こえてきた。

——さてよ、まさか、もしかして………ッ！

回復ポーションを飲んで、徐々に体力が回復しているシャドウが重い体に思い切り鞭を打って動かして、叫んだ。

「イヴッ！ 今すぐ空洞の中に進め！」

「えっ!?!」

「速くしろッ！」

真剣な表情でイヴに叫んでいるシャドウを見て、従うしかなかった。

イヴが空洞の中に走り出すのを眺めながら、俺は立ち上がり、翼竜に向き直る。背中から引き抜いた剣の先端を翼竜に向け、威嚇する。

「さあ、さっさと来やがれ——ッ!!」

再び炎を灯のような閃光を放った後、その翠の鱗をぎらつかせながら一回転した後、俺に向かつて急降下突進をしてくる。

おそらく、最初の内はこの突進しかしてこないはず、βテストにはこんなクエストなかったから、保証はできないが、さつきから突進ばかりしてくるので、そうに違いない。もはや慣れたもの。あっさりとはステップ回避をして避けるが、まだ、完璧なわけではく、多少服に翼がこすれる。

そして、案の定背後の空洞の壁にクチバシが突き刺さりしばらく動けない翼竜に振り返りイヴに指示した。

「イヴ、今だ！」

「わかってる！」

すでに、イヴの細剣の刀身がミスグリーンのライトエフェクトに包まれている。細剣基本技《リニア》だ。

続けて細剣のソードスキルをたたき込むイヴ——だが。

「なにこいつツ!? 硬すぎない!?!」

そう、この翼竜は途轍もなく硬かった。

イヴがソードスキルを放った際に派手なダメージエフェクトが翼竜から散るが、実際減っている体力は些細なものだった。

そして、ついにタイムリミットが来て、クチバシを抜くと、シャドウの方に振り返り水平に突っ込んでくる。

今、分かった気がする。このクエストが二人限定な理由が。

俺は、さっきの急降下よりも遙かに遅い突進してくる翼竜の通りざまに単発水平斬り《ホリゾンタル》を放ち、翼竜の頭の先端から足まで水平なダメージエフェクトの傷口を負わせる。

「ぎあああああああ——ツツ!?!」

流石に聞いたのか、上擦った方向を上げながら天に昇っていく翼竜。

残り体力——半分をきった。

もう少しで倒せる。翼竜はさっきと同じような動作で、大きく翼を開きながら体を反り……

「……ッ!」

シャドウは瞬間、今までにない違和感と得体の知れない嫌な感じに襲われた。

そして、半衝動的に俺は後ろにバックステップしていた。

背後の空洞で待機しているイヴも驚いた声を上げる。だが、こちらの行動は済ませてしまった。このくらい速い戦闘ならば、RPG方式で攻撃できるのは一回限りしかできない。

つまり、このタイミングで、翼竜が突進をしてくれば、俺は剣でガードするくらいしか打つ手がない。俺の体力も、徐々に回復してはいるが、耐えられる保証など、どこにもない。

自分のあまりに無計画な行動に齒噛みしながら翼竜を睨んでいると——翼竜がしてきた行動は違った。

翼竜は自分のクチバシから炎々に燃えるブレスを放ってきたのだ。そうすると、俺がバックステップした行動は正しく正解、もしもさっきのまま横に回避しようとしていれば、間違いなくブレスに巻き込まれていただろう。

——なんで、ブレスが来るってわかつたんだ？ ……咄嗟に動いてしまったから分かんが、結果オーライだ。

翼竜のブレス攻撃が終わり、天から見下す鷹のような鋭い目つきで俺を睨んでくる。すると、今度は予備動作全くなしに突進してきた。

それは、明らかにさっきまでの突進とは数倍は速く、避けるのが限界だった。「わあっ!？」

突進をギリギリで避けた俺に続き、背後からイヴの驚いた声が聞こえてくる。

………今、決められれば、決めといたほうがいいか……

俺は、覚悟を決めて空洞に走りながらイヴに指示する。

「イヴ！ 全身全霊で目一杯ソードスキルをたたき込め！ もっと体力が減ったらそれいっつは何をしてくるか分らんぞ！」

「う、うん分かった。セアアアア——ッ!!」

イヴのソードスキルが翼竜の鱗をダメージエフェクトを散らせながら削っていく。それに伴って体力も段々と減ってきていく。

行ける、俺が失敗さえしなければ、いけるはずだ。

「おおおお——ッツ!!」

俺は叫びながら翼竜の背後に突っ込みながら、片手剣基本突技《レイジスパイク》を放つ。

威力さえ望めないものの、多少ダメージを与えながら相手に距離を詰められるのは便利だ。

俺は剣が翼竜に深く突き刺さる前にシステムに抗いながら引き抜く。そして、それと同時にライトエフェクトが薄れていく——俺はライトエフェクトが完全に決めるその前に動いていた。

《レイジスパイク》のモーションから最も近いモーション、それが《スラント》だ。俺はそのまま腕を持ち上げ、《レイジスパイク》のライトエフェクトが消える前にソードスキルのモーションを作ること成功し、再び刀身がミスグリーンのライトエフェクトに

包まれる。

それに上乗せしてダメージを上げて、翼竜に放つ。体力が一人が与えるダメージとしては多いダメージを与え、希望が見えてくる。だが、問題はこの先。

さつき俺がやったソードスキルの硬直が来る前にモーションを作って再びソードスキルを発動する技は、絶対条件としてその前に放ったソードスキルのモーションと限りなく近いモーションのソードスキルでなければできないのだ。

まだ使えるソードスキルが少ない今、最もこの技をするのに必須なのは《レイジスパイク》と《スラント》だが、それ以外の組み合わせは現段階では不可能だ。

何せ、ソードスキルが発動し終わって硬直が来るまでの時間、僅か一秒未満。

βテストの時に偶然、この技が出来た事から始まり、それからずっと練習してきた。勿論、βテスト時代の俺だったら使えるソードスキルも多く、組み合わせももう少しあったのだが、練習の果てにやっとできたのが《レイジスパイク》と《スラント》の組み合わせなわけだ。

そして現状、組み合わせのソードスキルを使い切ってしまった俺は、硬直に縛られた。その間もイヴが攻撃してくれていて、もう少しで倒せるまでいつているのだが……

——今のイヴのソードスキルじゃ体力を一気にゼロにするほど火力の高い物はない。やはり、俺がもう一度あの技を成功させれば……!!

俺が硬直から解けたのと、翼竜が壁からクチバシが抜けたのは、同じタイミングだった。

「行か……せるかよッ！」

今から組み合わせのソードスキルをしても、逃げられる隙を作ってしまったかねない。だが、クチバシが抜けたことで当然翼竜は天に舞おうと後ろを向くわけだ。

「ハッ!!」

俺は、完璧に翼竜の振り向きざまに頭を捉えた、そして、左の肩に乗せるようにした剣の刀身が鮮やかな青に包まれる。

俺は剣を振りかぶる寸前に力を上乗せして威力とスピードを上げる。幸い、イヴが頑張つて最後まであきらめずに体力を削つてくれていたおかげで、これが決まれば倒せるだろう。

頭を捉えた剣が少し斜め下気味に振り下ろされた後、今度は右から水平斬りが翼竜の頭を切り裂いた。片手剣水平二連撃斬り《ホリゾントル・アーク》。

そして、最後に断末魔のような唸り声を上げながら翼竜はガラス片となつ四散していく。

終わつた、一度はもう終わりかと思つたが、何とか倒せた……

そう思つた途端、体の力が抜けてその場に座り込む。

「はぁー、つつかれた……」

イヴが寝つ転がって疲れ切った体を休ませる。そして、俺は寝つ転がっているイヴと目が合った。

すると、言葉は要らないかのようににこつと笑顔だけ見せた。

それから数十分後、休憩し終わった俺たちは空洞から出てくると、眩しい日差しが迎えてくれた。そして、クエストをクリアして行こうと下へ下がると、

「うわぁ………」

「……霧が晴れてるな」

モンスターを倒したからか知らないが、不思議と来るまではあんなに濃かった霧が嘘のように無くなっていた。

これなら、ここからでも第一層の誇大な景色を見れるはずだ。

そう思いながら依頼人のマウに声を掛ける。

そして、マウは明るい表情で、

「ありがとうございます！ 私の代わりにモンスターを倒してくれて、これ、差し上げま

す」

目の前にウインドウが現れるそこには「翠の片鱗」というアイテムが十個くらいもらえた。さっきのドロップアイテムに竜の鱗だとか普通のドラゴンを倒した時共通のアイテムだけだったから、ここで限定アイテムを貰えたらしい。

しかし、何かの防具や武器に使うのだろうか？ このアイテム。

俺はウインドウのOKを押し、アイテムは自動的にアイテムウインドウの中へ送られる。すると、マウの頭上にてていた「↓」マークが無くなった。

「あなた達二人にはとても感謝します。それでは、私はこれからモンスターを倒したと報告してきます」

直後、マウの体が段々薄くなり始め、やがて完全に消えた。

「マウは妖精だからあーやって帰って行くんだ……」

そういえばそんな設定あったな……翼竜との戦闘が激しすぎたせいで、そんな事忘れている。

長かったクエストを終えた俺はイヴの腕を掴んで端に歩いた。

「えっ!？」

少しばかり強引な行動にイヴの頬に紅が浮かぶ。

俺は後ろに振り向かず歩きながら言う。

「クエストを頑張った俺たちに褒美があるはずだ」

そう言いながら、山頂の端に付いて足を止めた。

そこには、絶景と呼べる程の美しい景色が広がっていた。

隣に居るイヴの顔がばあ、と明るくなる。

「わあ……………」

山頂から見える第1層のフィールド、遠くには始まりの街がうつすらと見え、何よりフィールドの一部の浮遊島から滝が落ちて、夕日が滝や湖を朱色に反射されていた。

浮遊島が重なった奥に見えるオレンジ色の眩い夕日が第1層を照らしていた。

もうすぐ日が暮れる。夕日が何処かに薄くなり始めて月光が輝く夜に変わるのだ。

「よし、少し遅くなってしまったが、本当の目的を果たすか」

「うん！」

それから俺たちは山に来た目的であるピクニックをした。夕飯をツールバーナから持って来た食べ物で済ませて、いつの間にか夕日が隠れて月光が第1層を照らしていた。

幸い、ここはモンスターがPOPしない場所なので、ここなら寝袋を広げて寝れ

る訳だ。

もう日が降りて、上層の地面に輝く星々が煌めいている。

俺たちは並ぶようにして寝袋に入って煌めく空を見ていた。

これもちがテクスチャだろうが、現実と大差ない程に美しく、目が奪われる。

数十秒たつぷり見た後、隣からイヴの声が聞こえてきた。

「すごい綺麗……このゲームでも、こんな景色が見れるなんて……」

「ああ、来てよかつたろ？」

俺は振り向いてイヴの顔を覗く。夜空を見上げて目を見開いてその光景を目

に焼き付けようとするイヴの横顔は、月明かりに照らされてより一層朱色の髪が綺麗に

輝いて見えた。

いつまでも見ていたい程だったが、流星にさっきの戦闘の疲れからか、どつと疲

れが体を押しつぶしそうだ。

俺は向き直って再び夜空を見上げる。美しい大小輝く星たちを見ていたこの時

だけは、ここがデスゲームという事を忘れてしまいたいようになる。

俺はそのまま、ゆっくりと瞼を閉じて、深い眠りに付いた……

突然吹いてきた冷たい風が頬を撫でる。その冷たさに体をぶるつと震わせながらイヴは瞼を開けた。

今何時だろう……、そう思うがまま片手を寝袋から出して空中に縦線を描く。すると、ちりりんと軽々しい音が響いて紫のウィンドウが現れた。

時刻は午前2時半。何故こんな時間に起きちゃったんだろうと思いつつ、再び眠りにつこうとね右に寝返りを打つ——と、横には気持ちよさそうに寝ているシャドウの姿が目に入った。

どうやらちようどシャドウもイヴの方に寝返りを打っていたようで、お互いが見つめ合いながら寝る状況になる。

イヴも成長はする。何とか意識を停止させるのを一瞬に抑えるのに成功したイヴは深く深呼吸をする。

——出しちゃったこの手……またしまうの面倒だよ……

と、自分に言い聞かせてシャドウに手を伸ばす。そして、出ていたシャドウの左手を握った。

その時、心臓の鼓動が大きく跳ね上がった。途端に恥じらいが込み上げて来て顔

が熱くなる。

もう、認めざるおえないかもしれない。やっぱり、私はシャドウの事、好……
「……………!!?」

声にならない唸り声を上げるイヴ。

「……ち、違う……好きって言つても、あくまで気持ち兄としての好きであつて、決して異性としての好きでは……!」
わ、私はか……海斗の妹なんだから！
義理だけ……

段々考えていると頭の中ぎぐちやぐちやになってきて考えられそうにないので、
思考はそこで終わった。

今まで私は恋なんて物を本とかでしか見たことが無かった。だから、分からない。この、気持ち、一体海斗を兄としての好きな気持ちなのか……それとも本当に異性として好きなのか……

「……でも、私は本当の好きの方が、いいな……」

私は、シャドウの寝顔を見つめた。

現実世界では、顔のせいで皆に怖がられてたらしいけど、私はそうは思わない。だって、その奥にある色んな海斗の顔を見つけたから。

私は、シャドウの顔を見つめながら目を閉じた。

「お休み……」

そして、シャドウには聞こえない極小の声で囁くように言った。
「……大好きだよ……」